
勇者はひらりと身をかわし

草木

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勇者はひらりと身をかわし

【Nコード】

N7652Z

【作者名】

草木

【あらすじ】

腐れ大学生の工藤宮人は、ある日よんどころない事情から異世界に転移する。「今の時代なかなか就職も厳しいし、こっちで生きていくのも悪くないか」などと悠長に構える暇もなく、次から次へと芽づる式の災難が彼を襲う。気の毒な工藤に明日はあるのか。たぶん無い。そんな新感覚回避系ファンタジー。

ロールカーテンごしに差しこむ夕日が、室内をあかね色に染めあげている。

おれは目を擦って目やにを落とすと、腥いあくびをして体を起こした。

居間で寝ちまったのか。

缶ビールを数本呑んだ程度なのに、こめかみの奥が疼く。コタツで寝たせいで、軽い脱水症状になっているらしい。

ふらふらと立ちあがって台所で水をがぶ飲みする。きんきんに冷えた真冬の水が胃袋にしみる。胃粘膜も荒れ放題なのか。

「つまみ食つとくんだったか」

職場から帰宅し、そのまま駅前のコンビニで缶ビールを数本買ったものの、肝心かなめのツマミを買い忘れた。気づいたのは国道の横断歩道を渡ってからで、今さら赤信号を待つて買いに戻るのも癪で、そのまま帰宅したのだった。

うっ、体冷えちまった……。

おれは二の腕をさする。

コタツで寝ると、掛け布団から露出した上半身が冷えてよろしくない。頭ではそう理解しつつも、コタツでぬくぬく微睡む気持ちよさに、ついつい長居してしまう。

「あー、今日早番か」

カレンダーの早のマークを見て、おれは忌々しさに舌打ちする。

早番は午後十時からの勤務なので、遅くとも九時には家を出なくてはならない。これから風呂を沸かし、夕飯の仕度をするとなると、いつまでもうだうだしてられない。

冷凍肉並みにこちこちの上半身を軽くひねって目覚まし代わりにすると、おれはテレビの電源を入れ、それをBGMにして米を炊く

仕度に取りかかることにした。

男の一人暮らしだろうと最低限米くらいは炊け、というのが栃木の両親のモットーだ。

その信条と関係あるのか知らんが、毎月、おれの住むアパートにて米と野菜が届く。おかげで大学生活を始めて二年間、主食に不自由することはなかった。

もっとも、向こうはおれが東京でまじめに刻苦勉強していると思っ
っているからこそ、まめに仕送りをしてくるんだろう。

実際は講義にもろくに出席せず、毎日バイトとコンパ三昧の自堕落な生活を送っているとは夢にも思っまい。

「うし、そろそろ出るか」

パソコンの時刻が二十一時を指したのを見ると、おれはブラウザを閉じてスタンバイにした。

ひとつ風呂浴びて飯を食ったあと、仕事に行くまでだらだらとネットをするのが至福のひとつときだ。

だが、楽しい時間というのはまたたく間に過ぎてしまうもので、早くも次の勤務がやってくる。まったくもって気が滅入る。

学生だから週四日の勤務だが、社会人はこれを週五日、ヘタすると土日出勤までこなすんだからおそろしい。日本人働きすぎ。

けどま、食い扶持を稼がにや暮らしは成り立たんわけで、世の中ってやつはホントに世知辛いもんだ。

そんな愚痴をほざきながら、服を着替え、高校時代から愛用のシヨルダーバッグをひっ提げて家を出た。

おれが働いているのは、都内にある郵便局の某支店だ。そこでゆうメイトの深夜勤を三ヶ月前からやっている。

郵便局というのは、基本、二十四時間人がいて働いている。昼は昼で差立やら何やらで忙しいらしいが、夜も結構な忙しさだ。

支店の裏口につき、ロッカーでエプロンに着替えて郵便課の前に

並ぶと、すでに先輩メイトたちが数人集まってきた。

「あ、工藤さん」

おれを見つけるなり、こぼれるような笑顔で出迎えてくれたのは大学生の林太一だ。

太一はおれより一年先輩なのだが、年齢では年下なこともあっておれをさん付けする。

大学ではソフトテニス部所属らしいが、青白い肌と分厚いメガネ、くせのあるセミロングの黒髪という明らかにインドア系サークル風のいでたちなのが気になる。

「うちの部はみんなこんな感じですよ。雨の日は部室でスマブラ大会やニコ動鑑賞会とかしてますし」

「おれの知ってるテニサーと違う……」

「今度、ニコニコ動画に踊ってみた系の動画を上げる予定なんですよ」

「それ、もはやダンス部なんじゃね？」

とまあ、こんな彼だが、ゆうメイトとしては有能らしく、入社一年目ながら特殊や窓口などに入って活躍している。

「へえ、太一くんテニスやるんだ？」

太一の横の中年太りの男性が、おれたちの会話に割り込んできた。辻木昇、という髪に白いものが混じった四十すぎの黒ぶちメガネのおっさんだ。ゆうメイト三年目のベテランさんだ。

以前は建築資材メーカーの下請けで働いていたが、過労で倒れて会社を辞め、今はバイトの掛け持ちで口糊しているらしい。

バイトを三つもやっていても「以前の職場に比べたら楽」だそうだから、前職のブラックさ加減は相当だったようである。

「おれもさあ、若い頃は結構テニスとかやってたんだよね。太一くんと違って、おれのは硬式なだけだよさあ」

辻木さんがねちねちした口調でしゃべる。語尾に「さあ」をつけるのは彼の特徴だ。ゆうメイトの深夜勤は、結構変わっている人が多くて面白い。

そうこうしているうち、課長代理がやってきて、朝礼を始めた。夜なのに朝礼はおかしいが、必ず「おはようございます」から始める。そういう慣例だ。

他の支店の窓口で詐欺があつただの、重い米袋に果物の箱が潰される事案が発生したあの、と課代がくどくどと能書きを垂れるのを話半分に聞き流す。

隣の林くんは相づちを打ちながら真剣に聞いている。相変わらずのまじめくんだ。

辻木さんはおれ同様、うわの空だ。養豚場の豚のようなたるんだ目つきで、銀色のざらざらした不精ひげを撫でている。

出勤簿にハンコをつき、今日の担務を確認する。うちの支店では、仕事はローテーションでまわしているため、日によって受け持つ仕事異なる。

「また通常とコツか」

新入りのおれは勤務の大半が通常区分だ。所謂、普通の葉書や封筒、バルクと呼ばれるダイレクトメールやカタログなどを、配達区分に沿って仕分ける単純作業だ。

「最初のうちは、みんなそんなもんですよ。慣れてきたら、税付きとか区分機とかやらされますから」

税付きと言われても、新米のおれにはよく分からない。区分機は、郵便課の真ん前にどでかい装置が設置してあるので分かる。封筒や葉書などの小型郵便物は、これにがんが流して機械で区分する。

「僕も今日は通常ですから」

「あ、そうなんだ」

「今日は日曜なんで、そんなに忙しくないと思いますよ。小包も少ないはずですよ」

「そう願いたいもんだな」

おれたちは到着した郵便物を積載した銀色のパレットを押して、局内奥の区分場へと移動した。

深夜の局内は静かだ。職員の内大半は帰宅し、残っているのは数人

の役職者と、おれたち深夜勤のゆうメイトくらいだ。

集配課のデスクの前を通過し、区分場に到着すると、パレットを開いて郵便物を出してゆく。

ケースに詰めてある郵便物を一抱え持ち、それぞれ区分だの前に立ち、区分をはじめめる。

区分だな、というのは小さな長方形の升に別れた鉄製の箱だ。学校にある下駄箱の、蓋がついてないものを想像したら、それでいたい合ってる。

その区分だなには細かく番地が振ってある。たとえば「杜王町12-198」という風に、その地区の番号が大ざっぱに割り振ってある。

郵便物を道順に沿って細かく組み立てるのは、実際に配達する職員さんの仕事だ。おれたちメイトは、職員の組立の手助けのため、大まかに分類していくだけでいい。

大まか、とは言っても、ひとつの支店の担当地区は結構広いため、覚えるのはなかなか大変だ。特にうちの区は、番地の旧番と新番が入り混じっているんで一手間だ。

おれなどはいちいち新旧対応表と睨めっこしなくてはならないが、太一は流れるような動作で郵便物を区分する。

「おー、早業だな」

「こんなの工藤さんだって半年もしないで出来るようになります。むしろ、出来ない朝までに片づきませんか」

「早朝勤に文句言われちまうな」

太一の手の動きを真似して素早く区分しようとしてみるが、なかなか上達しない。手にした郵便物の住所を読み取るとき、どうしても動きが一瞬止まる。

難しいな。

住所が表記されている場所が、郵便物によってバラバラなのがくせものだ。ぱつとみると、どこが住所なのか分からず目がすべる。

それに加えて、手書きの拙い字から、DMの小さな印字まで、さ

まざまな文字の種類があるのが厄介だ。

差出人があやふやな住所で送ってきたり、宛名ラベルの表記が誤っていたりするので、油断するとすぐ誤区分が生じる。

一枚二枚なら誤差の範囲だが、あんまり誤区分が多いと職員から文句が飛んでくる。

「おい工藤」

かさばるタウン誌を区分だなに突っ込んでいると、背後から野太い声で呼ばれた。

「かごが満杯だ。集配課の前まで持ってつてくれや」

横柄な口調で命令するのは、六十すぎのごま塩頭の爺さんだ。石津琢郎という、ここの支店のゆうメイトでは古参株である。

「これ区分し終わるまで待っててください」

「いいから早くやれよ」

石津の爺さんがイライラした様子で指図する。おなじメイト同士なのに、古参だからか、まるで部下に命じるような口調だ。

わざわざ反撥するのもくだらないので、おれは愛想よく返事をして、郵便物で一杯のかごを集配課まで運んだ。

深夜に区分される郵便物は結構な量なので、かごが一杯になると集配課の方へ持って行き、カラのかごをカートに積んで戻ってくる。

「つたく、人使いの荒い爺さんだ。」

嘆息して戻ってくると、石津の爺さんが、何故かしかめっ面でお出迎えてくる。

「おい工藤、なんだこの区分は？」

「はあ」

「相生町の三丁目はこの下の棚だろ。半分近く間違ってるじゃねえか！」

「あ、それ一時的に入れてあるだけなんで心配ないです。それにあとでかごに入れ直した方が効率的ですから」

「バカが。んなことやってるから、おまえぜんぜん仕事覚えねえんだろ！」

石津が塩辛い声で頭ごなしに否定してくる。

正直、むっとする。

上司ならともかく、単なる先輩にここまで言われるのは業腹だ。高校時代のおねなら、絶対逆ギレして即日仕事をバックレてる。

が、大学生にもなつてその程度でバイトを辞めたら忍耐が足らなすぎる。第一、すぐ金欠になるのは明白なので、おねは適当に申し訳なさそうな顔をして詫びを入れた。

「ったくよー、なんなのあのジジイは？」

「石津さんは誰に対してもあんな風ですよ。僕も新人の頃は、よくいびられました」

石津から離れたところで愚痴ると、太一がはんなりと眉をしかめる。

「けど、あんな風に否定されるのはなあ。おねのやり方が、絶対楽なのにな」

「古参の人つて、自分のやり方にポリシー持つてるんで、新人が効率的な手法でやると嫌がるんですよ」

「昔かたぎの職人かよ……」

むすつとした仏頂面で黙々と区分する石津を、おねは横から睨みつける。

そうこうするうち休憩時間になったので、おねたちは食堂に引きあげることにした。

昼間は職員で賑わう社員食堂も、午前三時ともなると閑散としたものだ。自販機の駆動音が、やたらと小うるさく聞こえる。

適当な席に座って羽根を伸ばしていると、そろそろと別の担務の深夜勤が戻ってきた。

ニコチンを入りに喫煙室に行く人や、テレビのリモコンをまわす人、携帯ゲーム機をはじめめる人、椅子を並べて仮眠をとる人。めいめい好き勝手にすごしている。

コンビニの弁当をレンジで温めてもそもそ食っていると、突然う

なじに熱い感触がした。

「あちち！」

「あ、ごめん熱すぎた？」

「なんだ樋内さんか」

どこことなく鼻にかかったハスキーな声に、おれはほっと胸を撫でおろした。実際はさほど熱くなかったが、まったり休憩している最中だったので不意打ちだった。

「ごめんね。おどかさうと思って」

樋内さんがおれの隣の椅子に座る。

空気が動いて微かにベルガモットのにおいがたちこめ、思わず胸がどきつとした。

樋内さんの香水か。

さすが妙齡の女性だ。これが他の男どもなら、隣に座られると加齢臭と腋臭で不愉快な思いをするだけである。

樋内千紗さんは、ゆうメイト深夜勤の紅一点だ。肩まである髪をシュシュで束ね、薄手のとっくりセーターに薄藍色のジーンズという活動的な服装だった。

愛用のベージュのセーターはぱつんぱつんで、樋内さんの豊満なバストラインがエプロンごしでもよく分かる。

てか、正直反則級のエロさだ。

「はい、コーヒーどうぞ」

「あ、すみません」

つい胸もとに吸い寄せられがちな視線を厳しく戒め、おれは甘ったるい缶コーヒーをちびちび舐める。

「林くんから聞いたわよ。石津さんに絡まれてるんだってね」

「そうなんですよ」

「おかしいわね。石津さん、わたしにはここにこにこ愛想よくしてくれるけど」

それは貴女が美しく、なおかつあの爺さんが助平だからですよ、と喉もとまで出かかった言葉を激甘コーヒーで呑みくでした。

「工藤くんって、何回生？」

「は？」

「あ、大学何年生？」

樋内さんが思い出したように言い直した。

大学の学年を回生で表すのは関西流だ。もしかすると、樋内さんはそっちの生まれなんだろうか。

「二年です」

「そっか二年生かあ。若っかいなー」

年寄りくさい台詞を吐きながら、樋内さんはメランコリックな姿勢で頬杖を突く。

院の博士後期課程に所属する樋内さんは、大学に残って専攻の東南アジア史研究をつづけるかたわら、生活費の足しにゆうメイトをやっているそうである。

女子高時代はチアリーダーイングの土台だったと豪語するだけあって、腕力はそこらのもやし男子とは比べものにならない。十キロの米袋程度なら軽がる肩に担いでしまふ。

これほどの美人で、かつ明晰な頭脳を持ちながら、どうしてこんな冴えない場所で働いているのかは永遠の謎だ。

「石津さんもね、ああみえて結構苦労人なのよ。一昨年の暮れに、奥さんを自動車事故で亡くされて、ずっと独身暮らししてるみたいだから」

「ほかの家族は？」

「娘さんがいるみたいだけど、なんだか疎遠らしいのよ。まあ、この辺の事情は深くは訊けないから漠然としてるけど」

樋内さんが難しい顔をする。

奥さんに先立たれ、男やもめの独り暮らしと聞くとなんだか気の毒になる。むろん、だからと言って横暴を許す気にはなれない。

休憩時間がそろそろ終わるので、おれたちは食べた後始末をして席を立った。

喫煙室からぞろぞろと不景気な顔をした男どもが出てきて、一日

の後半戦の火蓋が切って落とされた。

食事休憩を挟んだあとは、たいてい小包の応援にまわる。

半地下にあるトラックの発着場に向かうと、ちょうど港からの大型トラックが到着したところだった。

荷受け口の両開きのドアが全開にされ、真冬の冷気がびゅうびゅう吹き込んでくる。パーカー一枚だと凍える寒さだ。

運転手が白い息を吐きながら運行表をわたし、樋内さんがそれを受け取って日付印を捺す。その間に、応援のおれと太一が、トラックに満載のパレットを局内に運びこんだ。

「おいおい、話が違うぞ。コツ大量着弾じゃねえかよ」

大量に到着したゆうパックを前に、おれは太一に絡んだ。

「あらー案外多いですねえ」

太一は呑気なものだ。

これでもお歳暮お中元なんかの繁忙期に比べたらましですからね、などと言いながら、さっさと到着入力にまわる。

おれは重い米袋やら缶ビールのギフトセットやらをふうふう言いながら運び、到着入力の済んだ小包を片っぱしから区分してゆく。

時刻はすでに午前四時をまわっている。これからどんどん荷物が輸送されてくるので、早め早めに処分しないと、トラックヤードが銀パレで埋め尽くされることになる。

落ちモノパズルゲーと一緒に、ある程度荷物が溜まると身動きが取れなくなつて極端に作業効率が低下する。そうなる前に片づけてしまわないと大変だ。

「ほら、おまえらさっさと運べ。詰まっちゃまうぞ。そら、ボケっとしてんな！」

石津が声を荒げて指図してまわる。

偉そうなことを言うのなら、お手本をみせてくれって感じだが、当人は応援するでもなく、区分機の方を手伝ってお茶を濁している。力仕事をしたくないので、なるべく楽な方を手伝おうとしているの

だ。

「仕方ないですよ。ご高齢ですし」

「ご高齢だったって、おれよか高い時給もらってるんだぞ。せめて手伝ってくれよな」

「ですよねー」

「ですよねー、じゃねえつての。」

職員に注意してもらいたいが、肝心の課長代理はデスクに引っ込んだまま出てこないし、古参の石津には文句を言わない。実質、現場は横暴爺さんの言うがままだ。

「畜生、なんなんだよ……」

ゴルフバッグやらスキーバッグやらを両手に持ち、血を吐く思いで運搬した。一便片づく前に次の便が到着するので、現場は脑梗塞を起こした血管並みに詰まってきている。

「ほら、工藤くんガンバ」

横から励ましてくれる樋内さんだけが、唯一のおれの癒し、心の拠り所だ。

彼女が微笑みかけてくれるだけで、疲労困憊の体にふしぎな活力が湧いて出てくる。

それから四時間近く、おれたちはひたすら荷物を運んだ。持ち、運び、積み、下ろす作業をひたすらひたすら反復した。

早番なので六時上がりなのだが、とても片づかないので二時間分の超勤までして、どうにか今朝の到着分を全部片した頃には、午後八時すぎだった。

「お、終わった……」

最後の一個を運び負えると、おれはへなへたと壁にもたれた。

周囲は出勤してきた委託業者が行き交い、現場は殺気だった雰囲気だ。呑気に突っ立っていると舌打ちされるので、そそくさと退勤のハンコを押して食堂に帰還した。

「あ、お疲れさま」

ポカリを手にした樋内さんが、フェイスタオルで汗を拭きふき笑

顔を振りまく。

彼女だつて疲れているんだろうに、おれと違って嫌な顔ひとつしない。人間が出来すぎてて、ちよつと気後れすら感じる。

「お疲れさまです。お先失礼しえす」

疲れ果ててぞんざいな口調になる。

こんな日はさつさと帰つて酒呑んで寝るに限る。所属ゼミのレジユメ作成の件が頭に浮かんだが、光の速さで揉み消した。

「あ、待つて工藤くん」

「なんすか？」

「ねえ、工藤くんつてお肉好き？」

「えっ……あ、まあ」

好きですよ、好き好き、とくに樋内さんのそのエプロンの下のナイスな肉とか大好きです、と心の中で付け足した。

「お歳暮でもらつた米沢牛があるんだけど、わたしお肉だめなの。

良かったら、工藤くんうち来ない？」

「おれが樋内さんちに？」

「遅めの新年会を兼ねて、焼き肉をやるうと思つたの。どうかしら？」

おいおい、なんだこの強運。年始早々、今年の運気を使い果たしちゃまつたか。年末あたり運気欠乏で死ぬ予感。

「たいしたおもてなしはできないけど」

「行きます」

むしる行かせて頂きます、的な心境だったが、そこまで言うときモがられるので、素っ気なく、だが確乎たる意思を伝える。

「良かった。じゃあ、林くんと一緒に来週辺り来てくれるかしら」

「太一と？」

おれの心の中で何がへこむ音がした。

「ええ、肉の量が多すぎて工藤くん一人だと食べきれないと思つたの」

「あー、いやその」

おれ一人でも二人前食べます、と言おうとして尻込みする。食いしん坊だと思われるのは嫌だし、下心を悟られるのは論外だ。

「じゃあ、来週の都合のいい日を教えてくれる。太一さんと合わせ
て日時決めるから」

「あとでメールしときます」

「うん、じゃあメアド教えとく」

さりげなくメアドまでゲットした。

これならたとえ邪魔者付きだろうと十分モト（？）は取れた。高
望みしたらきりがなし、メアドと高級焼き肉で手打ちだ。

スマホのメーラーを開く樋内さんの真っ白な細い指を見つめ、お
れはだらしなくでれでれと鼻の下を伸ばすのだった。

都営地下鉄の階段を上ると、冬の鉛色の空がおれたちを出迎えてくれた。

「樋内さん宅は、駅から徒歩八分程度ですね。途中、何か買って行きますか」

「意外とのどかな場所だな。都心の一等地って感じじゃなーな」

都会の喧噪はどこへやら、駅から少し離れると、もう住宅街のど真ん中だ。入り組んだ路地裏に、小さな戸建てやおんぼろアパートがちまちま軒を並べている。

「ここいらは東京の下町ですからね。昔からの景観が残ってるんですよ。ぶらぶら歩くのに最適です」

「へえ、詳しいな」

「大学が渋谷なんで、授業の合間にあっちこっち探検してまわってるんです」

下町散策とは渋い趣味をしている。今から老後に備えて足腰鍛えてんのか。

ボンネットの上でまるくなるのら猫をひやかし、町工場のプレス機のうなる横の小径を通って行く。

「あ、ここですね」

太一が地図アプリの画面を指さした。

樋内宅は昔ながらの一軒家だった。トタン葺きの切妻屋根に格子ガラスの戸がある。NHKの朝の連ドラに出てくるような、昭和のにおいがぶんぶんする木造平屋だ。

「なんかイメージと違う。おれの知ってる樋内さんは、もっとこう、オートロック完備のレディースマンション住まいで……」

「何ぶつくさ言ってるんですか」

太一がさっさと呼び鈴を押した。

「あ、おまっ」

「樋内さん遊びに来ました」
間延びした声で呼びかける。

レディーの自宅を訪れるのに、こいつには躊躇いというものはないんだらうか。

ジー、とこれまた古風な呼び出し音がして、スリッパの鳴る音がしたかと思うと、がらつと勢いよく戸が開かれた。

「いらつしゃい。中にどうぞ」

「お邪魔します」

「ゴメンね、散らかってるけど」

そう肩をすくめるが、実際、さほど散らかってない。むしろ床板がぎしぎし鳴るのと、すきま風が吹くのが気にかかる。貧乏書生の下宿的レトロ空間だ。

「この家、建つてどのくらいなんです」

「ええと、たしか築六十三年」

「六十三年？」

戦後間もなくに建てられた家だったとは驚きだ。擦り切れた畳おもてや、釘の飛びだした梁など、時代の流れを感じさせる。

奥の六畳間に落ち着くと、ちゃぶ台にケンタッキーやパック寿司を並べ、なみなみ注いだビールで乾杯をした。

「かんぱーい」

一気にグラスをあおるおれと太一。

樋内さんは肉の仕度のため、野菜を刻みにお勝手に立った。さく、さくと玉ねぎを切る快い音がお茶の間に響きわたる。

エプロン姿の樋内さんの楚々とした後ろ姿は犯罪的な可憐さだ。

おれが彼氏なら、そのまま抱きついて尻を撫でまわし「や、包丁握ってるから」と顔をしかめる樋内さんの耳もとで「じゃあ包丁以外のものを握ったら？」などと……

「工藤さん、工藤さんてば」

太一のもさつとした声で妄想が醒める。

「なんだ太一。今おれはすごく忙しい」

「樋内さん、タレ買い忘れたらしいんです」

「……おいおい」

焼き肉なのにタレなしとは。お好み焼きなのにソースを買い忘れるに等しい愚行だ。

が、逆に考えるんだ。太一をパシリにやったらその間二人きりだと考えるんだ。

「ふむ、となると肉を振る舞われる側の人間、すなわちおれか太一が買い出しに行くべきだろうな。その場合、当然ながら年下のキミが行くのが筋というものだ」

「もう行っちゃいましたよ」

「……そうか」

おれのはしたない妄想中に、樋内さんはエプロン姿のまま、ととと、と部屋から飛び出したそうである。

「太一、人の夢とは儂いものだな」

「何言ってるんですか。工藤さん、ひよっとして酔ってます?」

訝る太一をよそに、おれは力が（おもに下半身から）抜けるのを感じた。

ま、今日は小賢しいのは抜きで楽しむか。

気持を改めると、げんきんなもので、とたんに胃袋がぐうと鳴る。

「楽しみですね、松阪牛」

「米沢牛だ」

ブランドすらうる覚えの太一に食わせるのは惜しい気がするが、せつかくの招待だ。みんなで楽しくやるのが一番である。

「ま、呑むべ」

「お供します」

樋内さんが帰ってくる前に、おれたちはビールでふたたび乾杯をした。

まわる、目がまわる。

ぐるぐる程度なら可愛げがあるが、ぐるんぐるん世界が大回転す

るから穏やかではない。明らか呑みすぎだ。

おれは呑みかけの缶チューハイを一気に呑み干すと、絶賛回転中の六畳間を見わたした。

まず、太一が死んでいる。

樋内さんにしこたま呑まされたのだ。

焼き肉のタレを買って戻ってきたあと、遅れを取り戻すペースで樋内さんはハイボールをぐいぐい呑んだ。

ほお、これは酒豪のたぐいだな、と感心しながら樋内さんの見事な呑みっぷりを鑑賞していたら、みるみる酔いがまわりだした。

「ちよつと、太一くん呑みが足りてないね。呑めるんならもつと呑みなさい」

「あ、はい頂きます」

ジト目でおれたちを睨み、赤ら顔で太一に絡みだした。

「ほら呑んだ呑んだあ」

「ではお言葉に甘えて……」

くそまじめな太一は、酔っぱらい相手にていねいに献盃を受ける。おれなら適当に呑んだふりをして誤魔化すところだ。

「よし男らしいぞ。じゃあ二杯目ね」

「ええっ」

樋内さんの方も、一杯二杯ならまだしも、太一が呑み干すたびに新しい酒を注いでくる。岩手のわんこソバ並みだ。

そうこうするうち太一は酔い潰れ、樋内さんはどこから持ちだしたのか、へべれけで壁にもたれてウクレレを爪弾きだした。

ぺんぺん、下手くそなウクレレの音色に合わせて、るらーとこれまた下手くそな鼻唄をうなる。

「うわあ……」

憧れの女性が部屋呑みで本性をさらけ出すのは、正直見たくなかった。才色兼備の完璧超人のイメージが音を立てて崩れる。

でも逆にその人間くささが良いよね、とおれの中の性欲の悪魔がフォローを入れた。

「うん、たしかにイイ」

ちゃぶ台を挟んだ反対側に座る樋内さんを、おれはこそこそ盗み見る。

酔い潰れて警戒心がほぐれたのか、薄い花柄のワンピースのすそから、むちっとした太腿があらわになる。

ちゃぶ台、邪魔すぎ。

おれは今日ほど座卓を忌々しく感じたことはなかった。

この板きれさえなかったら、樋内さんの太腿と太腿の合間の聖域が拝めるのだ。

男児たるもの、アドベンチャー精神を忘れるなかれ。

さつきまでの賢者時間はどこへやら、どうにかしてちゃぶ台の下を覗けないものか、とおれは首を捻る。

やむを得ん、おつまみを落としたフリをしてインナーの柄チエックとしゃれ込むか。

漢気をこめてピーナッツを畳に落とした瞬間、太一がふらふらと立ち上がる。

「も、漏れる……」

「おい！」

どっちだよ、と小声で問うと、両方だと言っただから由々しき事態だ。

お手洗いはどこかと尋ねるが、樋内さんは酔ってて返事の要領を得ない。

「ここね、トイレないの」

「んなバカな！」

じゃあ貴女はどこでするんだ、と問い詰めたくなる気持ちをぐつとこらえ、どうにか聞きだした。

どうやらお手洗いは建物の外にあるらしい。以前、下宿だった頃の名残で、今でも共用便所を使っているそうである。

「だよ。太一歩けるか？」

「無理でしゅ」

「ガチで無理そうだな……」

六畳間でただ漏れされても困るので、おれは太一に肩を貸して誘導した。

「すみません工藤さん」

「謝らんでいいからしゃんとしろ」

千鳥足の太一が寄りかかってくるので、一緒になって転びそうになる。

樋内さんの案内に従って、おれは太一を伴って玄関から出た。

外はすっかり日が暮れ、峻烈な木枯らしが服の生地を貫いて刺してくる。

アルコールで火照った手足がたちまち冷たくなるなか、おれは敷地の片隅にぼつんとある共用便所の戸を開き、太一を押しこんだ。

「工藤さあん」

「甘えんな。あとは自分でやれ。できるだろ？」

「ううう、やってみます」

正直これ以上は面倒みきれん。職場で気まずくなるのはご免だ。

太一が上下の始末を終えるあいだ、おれは外に棒立ちして庭を眺める。さすがに何かあったら駆けつける用意はしておく。この寒空の下、放置して倒れたら可哀想だしな。

「ううう、さぶ……」

おれは両腕をさすって縮こまる。

太一を連れだすどさくさで、上着を着そこねてしまった。分厚いトレーナーを重ね着してきたのがせめてもの救いだ。

「ったく、やれやれだ」

喫煙者なら一服する場面だが、煙草を飲まないおれはこんなとき手持ち無沙汰だ。

無聊にかこつけて、樋内さんちの庭をぶらぶら見てまわる。

草ボーボーの庭先は荒れ放題だ。ろくに手入れされてない。毎日、大学にバイトと忙しく、どうにかする暇がないんだろっ。

うん？

庭の片隅の葉を散らした金木犀の傍らに、見慣れないものを発見した。

「井戸か」

声にだしてつぶやく。

石積の小さな井戸だ。長い年月にさらされて、石のふちが矯められてまろくなっている。きっと上水道が開通する前からここにあるんだろう。

水、貯まってんのかな。

ちよつとした好奇心から、おれは井戸の蓋をはずした。朽ち木の板にブロックで重しがしてあるだけだから簡単に開いた。

お、水音が聞こえるな。

仄暗い井戸の底から、かすかにひたひたと水の打ち寄せる音がする。鍾乳洞の奥のような澄んだ水の音色だ。

思わず聴き惚れた。

それが拙かったんだろう。自分がそんなに酔ってないと過信していたのもある。

次の瞬間、両足が地面から離れた。

あ、まずい、と思う間もなく、おれは井戸の中に頭から転落した。澱んだ生臭い水を飲んだ。鼻から口からしこたま飲んだ。落ちた姿勢がわるく、狭苦しい井戸の中では体勢を立て直せない。

誰か！ 誰か助けてくれ！

つま先でがんがん井戸の側面を叩き、外の太一に報せようとしたが、その努力もむなしく、水を飲んだおれは一分もしないうちに完全に意識をなくしたのだった。

「ぐぶ、と口から特大の気泡が漏れる音がして途切れた意識が覚醒した。」

酸欠気味にしては、驚くほど意識が冴えている。パニックすら起こしてない。

「まだだ。まだいける。」

おれはゆっくりと水面を目指して体を動かした。呼吸さえ確保すればどうとでもなる。冷静になれ。しくじるな。

落ち着いたせいか、水温がやけに生ぬるく感じる。真冬の井戸にしては温かい。それとも地下水はそこまで温度が下がらないものなんでしょうか。

おれは体を捻るようにして脚を畳むと、百八十度回転した。頭上から太一が懐中電灯で照らしてくれているのか、明るい方へとしげんと体が動いてゆく。

「ぶはあ！」

水面めがけて一気に頭を突きだした。

胸一杯に空気を吸い、酸素の有り難みを肺で噛みしめる。

「はあ……はあ……」

荒く息を吸い、垂れてくる水を拭って目を開くと、おれは思わず硬直した。

「……は？」

おれが立っているのは水深数十センチほどの浅瀬だった。ぬるい水の中に、大量の藻が浮かんでいる。水中で暴れまくったからか、全身藻まみれだ。

訳が分からない。

「は？」

頭が真っ白になる。

たちのわるい冗談か何かだろうか。井戸に落ちて、水面に顔を出

したら見知らぬ場所だなんて前代未聞だ。バカげてる。

「まさか死んだのか？」

天国にしては殺風景だが、一応その可能性を疑ってみる。

おそろおそろ胸に手を当てると、とくと心臓が力強く脈動した。どうやら生きているらしくほっとする。

が、そうなるとますます状況が理解できない。ここが天国でもなく井戸の底でもなかったとしたら、一体どこなのか。

とにかく、ぬれた体を乾かさないと。

おれは岸にあがると、人目を避けるようにして右往左往し、トネリコの木の木陰で服を脱ぐことにした。

水を吸って重たいトレーナーや下着を脱ぎ、きつく絞る。藻も全部引っぺがした。

辺りは温かく、全裸だと少々肌寒い程度の陽気だ。少なくとも真冬の都内の気温ではないのはたしかだった。

となると、どこか別の土地だ。

「まさか、な」

荒唐無稽な妄想が膨らむが、確認するまでは断定したくない。ここが異世界だなんて想定は、およそ科学的ではない。

「ほんと何なんだよ」

愚痴りながら生乾きの下着を穿いていると、木陰に生い茂る灌木の中から、ぬっと見慣れない老人が顔を出した。

「うおー！」

パンツ一丁のまま硬直する。

よれよれのフード付きローブに身を包んだ短躯の老人だ。大きく腰が弯曲し、櫛材らしき杖を突いている。

「これはその、その川で溺れて……」

しどろもどろに弁解する。

老人は何やら口にした。

最初、発音がわるくておれが聞き取れないだけかと思った。ゆうメイトの深夜勤でも、たまにそういう人がいるからだ。

だが違った。老人がしゃべっているのは、日本語とはまったく別の未知の言語だ。

「はあ？」

まるで意味が判然としない。大学の第二階国語ですら単位を落としたこのおれだ。意味が分からずポカンとする。

老人の方も言葉が通じないのに気づいた。だが向こうさんはさして動じる様子もなく、手真似に切り替える。

「こっち来い？」

おれが指さすと、老人は小さくうなずく。そして諒解も待たずさつさと歩きだした。

「あ、待ってくれ」

おれは水の滴る服をまとめると、慌てて老人のあとを追う。

ふと空を仰いで、太陽が二つあるのに気づいたが、あえて見なかったことにした。

これ以上、あれこれ考えるとパニックになる。とにかく今は追うのが先決だ。

川を遡って行くと、石積の城壁らしきものが見えてきた。十メートル近い高さを誇る苔むした巨大石塁だ。

「ほお、城塞都市か」

雄大な光景に見とれそうになるが、老人がどんどん進んで行くので、立ち止まってもいられない。

てつきり城壁の門から入るのかと思っただが、老人が足を向けた先は門とは正反対の位置にある下水道の排水口だった。

老人はフードを脱ぐと、排水口の鉄格子を両手で掴んだ。親指ほどの太さの鉄棒が嵌めこんであつて、とても動きそうになかったが、ちよつと力を入れてずらすと、格子がすぽんと引っこ抜ける。手抜き工事だ。

「……中に入れと？」

老人の手招きにおれは尻込みする。

生まれてこのかた、下水道に立ち入るのは初めてだ。というか、水道管工事の人間でもなかったら、一生涯入らない。

だが、今はほかに行くあてもないのだ。老人の機嫌を損ねたくない。

下水道は、大人一人が辛うじて通れるほどの狭さだった。天井の高さはそこそこあるので、腰をかがめると楽々歩ける。

少し進んで行くと、沈澱池らしき水路がある。中に溜まっているのは脂ギトギトの汚水で、野菜の腐ったのやら、動物の白骨やらが浮かび、すさまじい悪臭だ。

真夏の河川敷の仮設便所の二オイを、さらに数十倍に煮詰めたような悪臭である。

一瞬、気が遠くなる。

が、老人は平然とした顔で池の横を歩いて行く。おれは吐き気をこらえながら、必死であとにつき従う。

さつき飲み食いした酒や焼き肉が、胃の中でめまぐるしく流動する。吐くまいと思ったが、途中で力尽きてその場にゲロした。

おえええっ、と唾液を垂らしてえずき、胃の中身をすべて石畳の床にぶちまける。

「ひっ！」

と、下水の壁の割れ目から、数匹のドブネズミが走りだし、おれの吐瀉物めがけて一斉に突撃してきた。

猫ほどの大きさの巨大なネズミだ。互いに咬みつきあって牽制しながら、未消化の肉塊をちうちう鳴きながら貪っている。

「なんなんだよこっ……」

ぞっとして身震いする。

そこからさらに幾つかの処理施設を抜けて行き、ようやく到着したのは制御室とおぼしき小部屋だった。

どうやら下水に流れこむ水量を調節するための水門を開閉する施設らしく、各種レバーの横に金属の銘板が貼りつけてある。

「……読めん」

銘板に刻みつけてあるのは、これまた見覚えのない文字だ。ヒエログリフ的な象形文字の下にくねくねした表意文字が刻んである。

「ここがあんたの家なのか？」

おれの問いに、老人は首をかしげる。

どうもその機械室が老人の住み処らしかった。服装から薄々そうではないかと思っていたが、老人は浮浪者だったのだ。

機械室にはほかにも四人の浮浪者がいて、部屋の中央で焚き火を焚いている。

突然あらわれた新入りのおれにも、まるで関心を示すことなく、むつつりとした様子で炎に薪をくべている。

おれと老人は焚き火の前に車座になって腰をおろした。

「あ、服乾かしているのね？」

老人が服を指したので、おれはありがたくずぬぶれの服と体を乾かした。

ぱちぱち、と樹脂の多い薪が爆ぜるのを見つめながら、おれは無言で体を暖める。

頭はまだ混乱してしっちゃんかめっちゃんかだったが、焚き火の前にしていると、ふしぎと心が安らぐのを感じる。

体の芯が温まると、だんだん眠くなってくる。服もほとんど乾いたので、それを着てごろんと横になる。

ここで寝て大丈夫なのか、との疑問は湧いたけれど、猛烈な睡魔には勝てない。どのみち盗まれるようなものもないし、殺されたら殺されたでそのときだ。

おれが「眠りたい」と手で枕をつくるジェスチャーをすると、通じたのか老人が小さく首肯した。

ご厚意にあまえて一休みすることにした。寝ているうちに、元の世界に戻るんじゃないか、との淡い期待を抱きながら。

目が覚めると、肉の焼ける焦げ臭いにおいが焚き火の辺りから漂ってきた。

浮浪者たちがひたいを突き合わせて、金串に通した肉の切れ端を焙っている。

「メシか？」

一瞬、空腹を感じたが、その肉の正体が、頭を潰されバラされたネズミだと気づくと、たちまち食欲がひっこんだ。

食べるか、と老人に勧められたが、ぶんぶん首を横に振って拒絶した。

老人の方も無理に勧める気はないとみえて、肉の代わりにイチジクのような形状のドライフルーツを三つくれた。

毒々しい色合いの果物だが、ネズミの肉に比べたらましなのでありがたく頂戴した。実際、齧ってみるとすこぶる甘く、お菓子感覚で全部食べてしまった。

べとつく指を舐めながら、おれは注意深く焚き火の周辺の浮浪者たちを観察する。

年齢は四十代から七十代だろうか。髪とヒゲは伸び放題で、全身が垢じみてどす黒く、数年単位で洗濯してない服はラメをまぶしたみたいにテカテカと黒光りした。

体臭も強烈なはずだが、下水の悪臭に鼻が鳴れきってしまったって、浮浪者たちを臭いとは感じなかった。

彼らの大半は元炭坑労働者らしく、肺をやられてしまったのか、ときどき厭な音のする咳をした。落盤事故で指や足をなくした者や、目をつぶした者、安宿の商売女を抱いて鼻をおとした者もいる。

ここの連中は、何らかの理由で社会から疎外され、追い出されてしまったのだ。そう思うとなんだか気の毒でならない。

だが、居場所をなくしたという点では、おれだって似たようなも

のだった。

元の世界では栃木の実家に帰れば両親や祖父母がいるし、地元の友達もいる。都内なら大学の友人や、太一や樋内さんがいる。

だが、この世界では天涯孤独なのだ。

そう思うと、胸に沁みるような孤独を感じ、おなじく孤独な浮浪者たちになんとなく親近感を抱いた。

それからの数日間をおれは下水ですごした。

わざわざ下水に滞在したのは、外に出て行く勇気がなかなか出なかつたからだ。

それに、おれのような人間がこの顔を出したら、不審者と疑われ、捕らえられて拷問され処刑されるのではないか。

怯えすぎだと思われるかもしれないが、おれの懸念はあながち的外れでもなかつた。

というのも、浮浪者たちも昼間のうちは決して下水から出ようとはしなかつた。例外は老人くらいだったが、その老人でさえ、市街地には行かず、例の抜け穴から城壁の外へ行くのみだった。

もっとも、このときは疑問を抱くことなく、人目を憚る浮浪者ならそんなもんか、と軽くみていたのは否めない。

翌日から、おれは暇をみては老人を捕まえ、あれこれ聞きだそうとした。

ほかの無気力な連中と違い、老人だけは瞳に力強さが残っている。彼ならおれの事情を理解してくれるかもしれない。

「なあ、あんた名前は？」

「？」

老人は「ごちゃごちゃとしゃべる。だが、あいにくおれには一言も分らない。

そこで作戦を変え、まずおれの名前を知ってもらうことにした。自らを指さし「クドウ」と繰り返した。

「クドウ？」

「そう、クドウ」

何度かやりとりするうち、おれの名前が工藤なのを判ってくれた。何度発音してもクドウーになまるのはご愛敬か。

老人はガンデという名前らしかった。どことなく厳しい印象の名前だが、当人も高齢者にしては逞しい体つきだ。

ほかの浮浪者たちと違い、彼は日中、どこからか手に入れてきた書物の頁をたぐってすごした。

おれも一冊拝見したが、文字が読めないのは当然として、活版印刷で刷られているのには驚かされた。

上下水道などの治水工事も、都市を囲む城壁、それにこの印刷技術からして、そこそこ文明化された世界なのは明らかだった。

「この絵は鉷山か？」

字は読めなくとも挿絵なら分かる。

書物の中に、つるはしやもっこなどの掘鑿道具や、隧道のささえ方、地下水脈の汲みだし方などの鉷山に関する図案がある。

おそらくガンデは鉷山技師か何かだ。それならほかの浮浪者に比べると教養が感じられるのも納得がゆく。

それからの数日、おれはガンデに付き従って仕事をした。

仕事と言っても、日課と呼べるのは深夜の食料集めと薪集めくらいだ。

残りの大半の時間はごろんと横になるか、ガンデを相手取って通じない会話に悪戦苦闘するかしてすごした。

食料の大半は、市民の食べ残しの残飯だった。深夜、ガンデが何処から漁ってくる野菜の切れ端や魚の骨などを、木のお椀に入れて手掴みで食べた。

最初のうちは、食べて数時間すると猛烈な下痢と嘔吐に襲われた。脂汗を垂らして苦しむおれをよそに、おなじものを食べたガンデたちは平然としたものだ。現代日本の清潔な食品に慣れたおれの胃腸には、彼らの食事は酷だった。

さいわい、もともと適応力はある方なので（自慢じゃないが、家

族でのベトナム旅行のときも二日で現地の食事に順応した。三日もすると何を食べてもあたらなくなつた。

下水での生活に慣れると、知らない土地に放り出されたショックも和らぎ、前向きに生きていく気持が芽生えてきた。

太一のやつ、心配してるんだろつな。

焚き火に使う薪を背負いかごに投げ入れながら、おれは元の世界に想いを馳せる。

おれが井戸に落ちたのを知って、太一はどうしただろうか。樋内さんと一緒に井戸を覗き込み、落水したはずのおれが消えたのを知つて愕然としたに決まつてる。

今ごろは失踪届が提出され、二人は警察から事情聴取され、痛くもない腹を探られているんだらうか。

「……帰りたい」

しぜんと、心細い言葉が漏れる。

おれの偽らざる本心だ。

悪臭のする下水道で、栄養価のない残飯を食る毎日に、心がすさんでくる。里心なんて、もう来たその日からついている。

せめて居場所を移れたらなあ……。

かと言つて、おれにはほかに行くあてもない。下水道を出て行くのは勝手だろつが、一度出てつたら、彼らは二度をおれの中に入れてはくれまい。

そうなつたら、言葉も通じないこの世界で生きのびるのは不可能に近い。路地裏でさみしく野垂れ死ぬのが目にみえる。

たとえ劣悪な環境でも、今は居場所と食事があるのだ。出て行くのは、最低でも片言程度の言葉を覚えてからでも遅くない。

「我慢しろ、今は我慢しろ……」

そう念仏みたく唱えて、おれはガンデ爺さんの指示に従つて黙々と薪を集めた。

四日、五日と下水道ライフをエンジョイするうちに、だんだん下

水での暮らしもわるくないと思えてきた。

考えてみれば独り暮らしのワンルームアパートだって、臭さ汚さの点では下水道と大差ないし、コンビニで買い求める添加物まみれのインスタント食品も、ここで食べる腐敗した残飯とたいして違いはない。

楽観的に考えたら、元の世界の生活と、ほとんど大差ないのだ。むしろ水道光熱費や食費が掛からない分、お得でさえある。

そんなお気楽な心で周囲を眺めるうち、気持ちに余裕が出てきたのか、機械室に集まってくる面子の区別がついてくる。

まず一番目をひくのが、ネズミ男のようなフードの浮浪者だ。この人はゆうメイトの辻木さんにクリソツだ。二人並んだらどっちが本物か分からないレベルで瓜二つだ。

この偽辻木さんの相棒が隻眼の小男だ。事故で片目をつぶしてしまったそうで、黒い眼帯を嵌め、どろどろ充血した片目で周囲にガン飛ばしてくる。

この偽辻木と眼帯、それにガンデ爺さんの三人が、この機械室の固定メンバーだった。そこに不特定多数の浮浪者が出入りするようなかたちだ。

こうした癖のある面子に囲まれながらも、おれの語学学習は難航した。

通常の語学学習では、相手の言語の意味を和訳して覚える。紙ならペーパー、缺ならシザーと、対応する単語をどんどん学ぶ。

だが、お互いの言葉がまったく理解できない状態では、こうしたごく初歩的な単語の和訳ですら覚束ないのである。

何をどこから学んだらいいのか皆目見当がつかず、おれは数日間、悩みながら試行錯誤した。

その甲斐あってか、四日めにしてようやく会話の糸口を掴んだ。ごく些細なことなのだが、ある一つの単語を理解したのだ。

それは「ロア？」なる言葉だ。実際の発音はもっと違うのだが、日本語にするとロアとなる。浮浪者たちの会話から、偶然その単語

の意味を察知したのだ。

このロアは「何？」という疑問詞だ。だからおれが何かを指さしながら「ロア？」と尋ねると「これは何ですか？」というような意味となる。

この単語を学んだおれは、興奮しながら手当たり次第指さしてガンデに尋ねた。

謎の干しイチジクを指して「ロア？」と言うと「ペーシエ」と答える。

イチジクはペーシエと言うのを知ると、単語を黒炭で下水道の壁に書きつける。そんな風にして、身のまわりの事物の名前をあれこれ和訳した。

ロアによる学習効果は凄まじく、生活の水準がぐんとアップしたのを実感する。

今まではイチジクが食べたくても、具体的に伝える方法がなかったが、ペーシエと言いながら口に食べ物を持っていく仕種を確実に伝わる。

語学嫌いのおれだが、このときは猛烈な勢いで次つぎと単語をまる暗記した。

人間、命がかかっていると必死になる。無一文でアメリカの片田舎に放りだされた人の方が、高い金出して英会話教室に通う人より英語が身につくのおんなじだ。

下水道生活七日めの夕方、珍しく眼帯が興奮した面持ちで焚き火の前にあらわれた。

蓬髪を振り乱して、ラク、ラクとだみ声で連呼している。

「ラク？」

おれが尋ねると、ガンデが早口で何か言ったが、おれが理解できないのを知って「プウラナー」と表現を改めてくれた。

プウラナーというのは飲料をあらわす言葉だ。「水」なのか「飲料」全般なのかは判別がつかないけど、プウラナーと口にすると必

ず水をくれる。

だが、眼帯の後ろから二人組の浮浪者が転がしてきたのは水ではなかった。ぶどう酒の詰まったオーク材の樽だ。

なるほど、プウラナーというのは英語で言うところのドリンクなのか、と心のメモに書き足しておく。

眼帯がコルク栓を抜くと、ぶどう酒の馥郁たる芳香が広まる。汚水と腐敗臭の悪臭に慣れ親しんだおれにとって、久しぶりに嗅ぐ日常生活の香りだった。

どこかの居酒屋から古くなったぶどう酒を格安で払い下げてもらったそうである。

多少、酸味はあるが酒には違いない。今夜はみんなで盛大に呑み明かし、日頃のうさを晴らそうじゃないか、と眼帯がわざわざ運んできてくれたのだ。

「へえ、案外イイやつだな」

普段は敗軍の将みたいな辛気くさい野郎だが、眼帯は意外とナイスなガイだ。おれの中の眼帯への評価がストップ高を記録した。

「ウラー、ウラープウラナー！」

さあ野郎ども呑め呑め、的なニュアンスで眼帯が浮浪者たちを集める。

そうして群がってくる浮浪者たちに、どんどん樽の中身を分け与えてゆく。命の水から値なしに飲ませるとっかの聖人なみの気前のよさだ。

配給の列に並ぶと、おれのお椀になみなみとぶどう酒を注いでくれた。

これ以上保存が利かないからか、樽をまるまる空ける勢いの大盤振る舞いである。

てか、ちよつと多すぎだ。

もともと右党だし、大学のコンパではひたすら呑む方だったが、あいにく今は胃腸の調子が最低最悪の絶不調だ。

下痢や嘔吐こそ治まったが、食生活のギャップは依然として厳し

く、胃腸がしくしく痛んでいる。

いくら好きな酒でも、正直がぶがぶ呑む気にはなれない。これ以上胃痛に悶え苦しむのはご免だ。

なのでほんの二、三口含んで味と香りを満喫すると、残りの酒はのんべえの偽辻木のお椀に全部注ぎ足した。

偽辻木はその貧相な顔に最大級の笑みを浮かべると「アリ！」と感謝の言葉を口にした。阿呆のような話だが、この世界でもアリはありがたいという意味なのだ。ふしぎな偶然もあったもんである。

深夜、おれは頭痛に目をさました。

二日酔い、か。

またやつちまったか、学習しねえな、と側頭部を抑えながら体を起こした瞬間、自分の体の異変に気づいた。

舌の根っこが干からびて、手足の感覚がない。座禅の直後のような、ぴりぴりした感覚の喪失に末端神経が冒されている。

違う。こんなのは二日酔いじゃない。第一、おれはほとんど呑んでない。この痺れはアルコールとは別の理由によるものだ。

毒を盛られた？

余所者のおれを疎ましく思い、排除するため、浮浪者の誰かがおれの酒に一服盛ったのかだろうか。

「違う……」

今度は声にだしてつぶやく。

おれの周囲には、意識を失った浮浪者たちが折り重なるようにして倒れている。単に酔い潰れただけなら、こんな異常な状態にはならない。

「辻木さん！」

はっとして、おれは浄化槽の壁にもたれる偽辻木のもとに駆け寄る。

「おい、嘘だろ……」

軽く肩を揺すぶると、偽辻木は横に倒れた。虚ろな半眼はぴくりとも動かず、唇は血の気が抜けてまっしろだ。倒れて気道が圧迫されたのか、くふ、と末期の声漏れる。

どこからか大量の八工が集い、彼の周囲をぶんぶん飛び交っている。そのやかましさは、おれには遠い世界の物音に聞こえた。

死んだのだ。

おれが彼に酒を譲ったせいで、致死量を超える毒を飲んでしまっ

た。

ある意味では、おれが殺したのだ。

「……なんでだよ」

おれは無言で手首の脈を採ったが、結果は言わずと知れたものだ。物言わぬ屍と化した偽辻木を前に、おれは打ちのめされ棒立ちした。目の前がまっくらで、ものを考える気力すら湧かなかつた。

「ひっ！」

背後から肩を叩かれ、おれは恥も外聞もなく情けない声で飛び退く。

その口もとを抑えられた。ガンデが鬼のような形相でおれに組みかかる。

「……来る」

ガンデが異世界語でそう口にする。

彼に殺意がないらしいのを知って、おれは肩の力をゆるめる。

「来る？ 何か来る？」

おれの質問にガンデが下水道の天井を凝視する。

機械室の焚き火の真上には、煙を外に逃すための竪穴がある。

その穴を通じて、何かの集団が駆けつけてくる音がする。革靴の靴音や、鎖かたびらが鳴る鈍重な金属音が聞こえる。

「衛兵か？」

街の衛兵どもが頭上の往来（機械室の真上は街の目抜き通りになっている）を忙しなく行き来している。

と、どこからか鳴き叫ぶ浮浪者の声が聞こえた。特徴的なキーキ一声の持ち主だ。

誰かがキーキー声の浮浪者を痛めつけているらしく、哀れな声で必死に許しを請うている。リンチが行われているようである。

一体、どうなってるんだ。

おれは毒によるめまいに苦しみながら、周囲の状況を理解しようと努めた。

眼帯が持ってきた酒には神経毒が盛られてあった。酒をたらふく

呑んだ連中は毒にやられて気絶し、呑んだ量の少なかつたおれとガンデが辛うじて目を覚ました。

周囲が騒がしいのは。毒のまわる夜更けを待って、衛兵どもが下水になだれ込んできたためだ。やつらは街に巢食う浮浪者どもを一掃するのが狙いだ。

「クドゥー、手伝え！」

ガンデがおれに砕石用ハンマーを手わたした。自らも、大ぶりなハンマーを掴み、錆びたレバーを必死にとんかん叩いている。機械室の水門のレバーを動かそうとしているのだ。

水路から水を抜く気か！

おれはガンデの頭の回転の良さに感心した。

これほど計画的な捕り物なら、おそらく主な下水道の出入り口は見張られている。どこへ逃れようと捕まるさだめだ。

だが、いくら当局でも、沈澱池の中までは見張るまい。汚水さえ抜ければ、ここから逃げるチャンスはまだある。

おれは必死になって、レバーを金槌で叩きまくる。長年、下手すると数十年以上も放置されっぱなしのレバーは、赤錆で可動部が完全に癒着している。

そここうするうち、水路わきの通路から、衛兵が一人飛びだしてくる。

明らかに一般徴兵の市民兵らしき十代の少年だ。ぶかぶかの鎖かたびらを着て、腰には真新しいロングソードを佩いている。

「おい、このままじゃ捕まるぞ！」

ガンデが何か叫んだ。

「おれが足止めする！」

おれは覚悟を決め、ハンマーを振りかざして機械室から飛びだした。

「うおおおおおっ！」

驚いたのは少年兵の方だろう。気絶した浮浪者を回収するだけの簡単な任務のはずが、ハンマーを手にした異様な男が、決死の表情

で襲いかかってくるのだから。

少年はたじろぎ、顔面蒼白になりながらも剣を抜き身構えた。

だが、彼は基本的に思い違いをしている。

全力で振りまわしたハンマーを、片手持ちの剣で受け止めるのはただの阿呆だ。

案の定、ハンマーの衝撃に耐えられず、ロングソードの柄が少年の手からすっぽ抜ける。

啞然とする少年の腹に、おれはハンマーによる容赦ない突きを入れる。

遠心力を加えてぶん殴ると少年が死んでしまう気がしたので、手加減したのだ。

が、それでも結構な威力だったようで、少年はギャグ漫画みたく吹き飛び、頭からどろどろの汚水の中へ突っ込んだ。

「ほっしやあ！」

おれはガッツポーズを決める。

と、機械室のレバーがようやく動きだしたとみえて、がちゅんと歯車の噛み合う音が聞こえた。

機械部分が次つぎと連動し、沈澱池を堰止めている鉄の水門が持ち上がる。

と、粘液状の汚水が流れだし、汚水の中で藻掻く少年兵ごと下水道の外に流出した。

すまん少年、生きててくれ。

おれは心の中で詫びると、ガンデと一緒に沈澱池同士をつなぐ鉛管の中へと侵入した。

水が流れたと言っても、どろどろしたヘドロが膝の高さまで溜まっている。その中に足を入れるのは途轍もない気色のわるさだ。

だが、泣き言を言っている場合ではないので、吐き気をこらえながら、ずぶずぶと汚泥の中を漕いでゆく。

「はあ……はあ……」

おれは荒く息をつく。

気分がわるい。

悪臭もそうだが、毒がまわっているのに激しい運動をしたので体調が悪化したのだ。

「クドゥー?」

「平気、へっちゃら」

強がつてみせるが、脂汗たらたら虚ろな目つきでは説得力もあつたもんじゃない。

必死にネバネバ地獄を進んでいくおれたちの背後から、怒鳴り声と松明の明かりが射しこんだ。

市民兵たちが鉛管の中まで追ってきたのだ。

迂闊だった。

たかが浮浪者狩りごときで、ここまでは、仲間の少年がやられたからだ。地の果てまで追っかけておれたちを捕まえ、刃向かつた見せしめとして鬨る気だ。

捕まつてなるものかと、おれたちは必死の思いで堆積物の沼を歩いて行く。こうなると無我夢中で、動物の死骸だろうとされこうべだろうと所構わず押しつけてゆく。

こみ上げてくる酸っぱい胃液を何度となく飲みくだしながら、目算で二百メートル近く逃げただろうか。

ふと前に行くガンデが立ちどまったので、出口が近いのかと期待して肩ごしに覗きこんだが、予想外の光景に落胆した。

それまで大人が屈んで通れるほどだった鉛管の径が、ここにきてぐっと小さくなった。屈むどころか、四つん這いで通れるかどうかという際どさだ。

ヘドロに顔をつけると思うと意気阻喪したが、それにも増して問題なのは、鉛管が幾枝にも分岐している点だ。

おれたちが向かっているのは、鉛管の上流、すなわち水が流れてくる方向なので、道なりに進んで行くと市街地のマンホールにたどり着くはずである。

が、進む道が五つも六つもあると、どこを通るべきか迷う。下手

な場所に出ると、その場で捕まるのではないか。

みるとガンデも険しい表情だ。下水道に精通した彼であっても、一つ一つの排水口の位置までは分からないものとみえる。

「クドゥー、あっち行け」

ガンデが一つの管を指さした。

「おれはこっち行く」

「べつべつ?」

「べつべつ。一緒に逃げる、だめ」

簡単な単語でガンデが伝える。

ここから先は別の道を行った方がいい。道が狭くて詰まる危険があるので、二人一緒だと立ち往生する。

そう頭では理解していても、ガンデとは別の道をたどるのは不安だ。一度離れ離れになって、また再会できるんだろうか。

おれの不安を察したのか、ガンデが肩を叩く。

「クドゥー、さよならだ」

「ガンデ……」

おれはガンデの逞しい肩に手をまわして抱擁した。

この世界に来て、そのまま野垂れ死んでもおかしくないところを助けてもらった。その恩義に報いることなく立ち去るなんて。

せめておれの気持ちを十全に伝えられたらいいのだが、おれの語学力ではそれもままならない。ただ感謝の涙があふれた。

「泣くんじゃない」

「ああ、そうだよな」

おれは目がしらを拭くと、ガンデとは別の鉛管へと進んだ。

顔面すれすれのヘドロに頬やら唇が汚れたが、もうおそれないと決めた。見ず知らずのおれをガンデがここまで助けてくれたのだ。

あとはためえ自身の力でなんとかする。それが男ってもんだ。

「はあ……はあ……」

狭く息の詰まる鉛管を、おれは必死に這い進んで行く。汗が目に入ってしみる。何かの角で怪我したのか、肩の皮膚がぱっくり裂け

て血が滲みだした。

突発的に見舞われる悪寒をこらえながら、泥を掻き、鼻汁を垂らし、涙を垂らしながらおれは一路出口に向かって突き進んだ。

ようやく前方に光が見えたのは、単独行動を始めてから何時間経った頃だろうか。途中で力尽きて気絶し、また息を吹き返して気絶した。

夜明け前、市民が水を使いたす前の時間に、ようやくおれは下水のマンホールの蓋に手を伸ばした。

危ういとこだった。気絶したまま夜明けを迎えたら、おれはあちこちから流れてくる生活排水で溺死したところだ。

マンホールの蓋を持ち上げると、建物と建物の隙間へと出た。

「へへ、ラッキーだった……な……」

おれは乾いた声で嗤い、そのままよろよろと歩き、柵の植え込みの下に座りこんだまま三度目となる失神をした。

ちくちく、と柵の葉に頬を突かれ、おれは薄目を開く。

すでに高くなっている双子の太陽に、ぬれて冷えた体が少しづつ暖まる。顔がパリパリするので両手でごしごし擦ったら、乾燥したヘドロが剥がれ落ちた。

人が来ないのを幸いに、三十分ほど日光浴をしてから行動を再開した。

と言っても、体が暖まるまで手持ち無沙汰にしているのも勿体ないので、今後の行動の指針のようなものを立てる。

まず一番の目的は、この街から無事脱出することだ。浮浪者狩りのとき、ほとんど顔を見られなかったが、あの少年が生きていたらそこから露見するおそれがある。

どこに行ったらいいのか、何をしたらいいのかは分からない。けど少なくとも生き延びるのがおれの目的だ。生きて、きっと元の世界に帰る。

それまでは泥水をすすする覚悟で（というかもうさんざん吞まされたが）この異世界を生きていく。

だが、まずは着替えなくちゃな。こんな汚水を吸ったトレーナーのままでは、ろくに外も出歩けやしない。

こんなことになるなら、この世界の服を一着もらっておくんだっ

た。
「まずは服が」

おれは着るものを探し求め、街の往来へと繰りだした。

おれが転移したのは、ユゴー市なる街らしい。ガンデが地図を開いて、ここがユゴーであると教えてくれた。

どうやら、おれがどこから来たのかを知るため地図を持ちだしたらしかったが、あいにく地図上にない地域だ。

しかし異世界から、などと言っても通じないから、もっと遠くか

らだ、と曖昧に誤魔化した。

ユゴ市はこの地方でも最大の商業都市とみえて、各地から行商人や買い物客などが集まってくる。

必要なものを調達するため、おれは商業区の市場へと出向いた。

朝市ではサツカーコートほどの広さの土地に、大小無数の出店が軒を連ねている。支柱を立てて、ボロ布のルーフトントを張りめぐらせただけの簡素な青空市場だ。

陶製の壺にオレンジや檸檬などの果物を入れた八百屋、獲れたての鮮魚を並べる魚屋、店先にサラミや燻製肉を吊るし、生きた鶏をそのまま売る肉屋など、さまざまな生鮮食品店がひしめき合っている。

辺りは八エがぶんぶん飛び、容赦なく食品にたかってくるが、店員も買い物客もまるで動じない。現代日本なら大騒ぎだが、ここでは八エがたかろうと日常茶飯事なのだ。

美味そうな食べ物を見てみると、ついつい涎が出てくる。無理もない。この一週間、口にしたのは干しイチジクと、家庭の台所から出る残飯くらいだったのだ。

ああ、せめて何か食えたらな。

無一文の身の上が、今はひたすら恨めしい。せめてパンのひとつでも買う金があったら、もう少し楽しく市場を見学できるんだが。

そんなため息を吐きながら、おれはパン屋の店先に並んだ焼きたてのバゲットを手取る。空腹で胃がぎゅると鳴る。

「おい、あんた」

と、ふいに店員に睨まれた。百九十センチはある屈強なひげ面の男性だ。

異臭を放つおれが、パン屋の店先に立たれては迷惑なんだろう。

愛想笑いをして離れようとすると、ぐいと引き戻される。

早口で聞き取れないが、おれが触れたパンを指さし、がみがみ怒鳴ってくる。

触ったんだから買え、ということだろうか。八エがたかるのは気

にしないが、おれのようなみすばらしい身なりの男が触ると、とたんに騒ぎだすんだから露骨だ。

とはいえ、おれは手持ちがない。ズボンのポケットをひっくりかえし、上着を脱いで有り金がないのを伝えようとした。

万引きしたわけではあるまいし、お金がないと言えば舌打ち程度で許してくれると思ったのだ。

だが、考えが甘かった。

おれが無一文だと分かると、ひげ面の店員は目を剥いておれに突っかかってくる。怒鳴る声も客に対してではなく、盗っ人に対して詰問するようなかんじだ。

どうやら、おれが万引きしようとしたと勘違いしているらしい。パンを手を取って戻した客が無一文だったら、疑われて当然か。どことなく剣呑な雰囲気だ。

「メ、メルチ……」

ととりあえず異国語で謝るが、男は血相を変えておれを店の中へ連れこもうとする。市の衛兵に引き渡す気か。なんてことだ。

ここで捕まったら、せつかく命から逃げてきたのが水の泡だ。おれは店員の手を振りほどくと、走って逃げようとした。ますます万引きだと疑われるが、どのみち誤解を解くのは無理なんだから仕方ない。

この騒ぎに市場が騒然とした。周囲の店舗から、次つぎと腕っ節に自信のある若い衆が集まってくる。

おれは困惑する買い物の間を縫って、なんとか逃走しようとした。立ち止まる人の群れを押し分け、誰かの靴を踏みつけながら、人の密集する市場の通りを疾駆する。

ほかの店舗の店員たちが一致団結して襲ってきたら、一瞬で捕まっただろう。だが、大半の連中は無関心だ。市場関係者といえど、一枚岩ではないらしい。

しめたぞ、これなら人混みに紛れて逃げ切れる。こんな簡単なら、いっそ混乱に乗じて本当にパンを盗んでおくんだった、と不埒な考

えまで脳裏にちらつく。

だが、人間、身の丈に合わない考えを起こすものではないらしい。市場の角の花屋の前を通ろうとした瞬間、店の奥から青年が飛びだしてきた。

臙脂色のチョッキを着た金髪の青年だ。くせのある髪をうなじの高さで結わえている。どこことなく眠そうな半眼に、人懐っこい柔らかな笑み。服装は市民階級のものだが、どこことなく高貴な印象を受ける物腰だ。

その青年が恭しく両手を開き、おれの進路を疎外する。優しげな顔をして、やることはきつちりとやるタイプだ。

おれがわきをすり抜けようとすると、青年は驚くべき身のこなしでおれの行く手を阻んでくる。プロのゴルキーパーなみの反射神経の持ち主だ。

「おい、どいてくれ！」

おれが怒鳴ると、青年は何やらごちよごちよとハスキーな声で主張する。

が、まったくおれに通じてないのを知ると、困ったような愛くるしい微笑を浮かべ、つんつんと真上を指さした。

「ん？」

とつられて上を見る。

と、花屋のルーフの上に、小柄な少女が胸を張って立っているのに気づいた。

太陽の逆光になって顔はほとんど見えない。強烈なまぶしさに、おれは目を眇める。

少女の白い前歯がきらんと光る。

その瞬間、少女はルーフをトランポリンにして空高く飛び上がるのと、あるうことがおれの顔めがけて強烈な飛び蹴りを食らわした。

「ほへあっ！」

顎関節がはずれるんじゃないかと思うほどの強烈な一撃に、おれは唾液を噴き散らしながら吹っ飛んだ。

花屋の反対側にある焼き菓子の店に頭から突っ込んだ。口の中に甘ったるいサブレ（らしきもの）の味が広がる。

お、美味ひい……

口に焼き菓子を詰め込んだまま、おれはずるずると店先に這いつくばる。

脳震盪で目の焦点がぶれぶれしたが、穏和な青年が暴力少女を叱っているのが見える。やりすぎ、だの店壊してどうする、だのと説教している。

一体なんなんだよ、もう……

おれは目を閉じて、口の中に突っ込まれた血の味がする焼き菓子を咀嚼した。

サブレなんぞを食するのは、修学旅行で鎌倉見学をしたとき以来だ。懐かしすぎて、熱い涙がとめどなくあふれた。

鼻血を垂らしたおれが連れてこられたのは、商業区のはずれにある簡易宿泊施設だった。

宿と呼ぶのもおこがましい、粗末な掘っ立て小屋の部屋に担ぎこまれた。

その際、おれの体があまりに汚いので、見かねた安宿のおかみさんが、濡れた布でおれの全身を隈なく拭き清めてくれた。

久しぶりに全身が清潔になって、気持ちよさに陶然とした。あとで知った話だが、このときおかみさんが使ったのは、宿泊客の馬を拭くための布だったそうである。逆に言うと、それほどおれの体が汚かったのだ。

「ふは、極楽ごくらく」

全身を拭かれ、水と黒パンの粗末な食事をあたえられ、その上宿の主人のおふるの胴着まで貸し与えられた。

決して破格の待遇ではなかったが、下水道での生活に慣れると、この最低限の衣食住ですら望外の喜びだ。おれは心の底から満喫してわら布団のベッドに横たわる。

一体、これから何が始まるんだろうか。

罪人に対する扱いとしては奇妙だ。まさかパンの代金を払うため、男娼としてむくつけき中年おやじの相手をさせられるのか。

「ま、まさかな……」

想像したら思わず尻がキュンとなる。いくら良くしてもらえても、快く尻を貸せるかと言ったら別問題だ。

不安な面持ちでベッドサイドに腰かけていると、乱暴なノックの音がした。

「どうぞ」

「おう、入るぞ」

「!?!」

ドアの木枠を抑えながら入ってきたのは、身の丈二メートルはある巨漢だった。水夫のようなさらし布を頭に巻き、青くざらざらした無精ひげを生やした半裸の男だ。

おれの妄想を具現化したようなガチムチのおっさんがあらわれ、おれは思わず腰を浮かして尻を押さえる。

だが、おっさんはその山賊の首領のような容姿とうらはらに、極めて温厚な人物らしく「まだ寝てな」と優しい顔で一声かけると、豪快なガニ股でのしのし退室した。

「なんだよ、様子を見に来たのか」

だよなあ、とおれはほつと安堵し、わら布団に寝そべる。

寝てる、と言われてもこの状況で眠れるほど神経が図太くない。

宿の節穴だらけの天井を仰ぎ、元の世界に帰ったら天ぷらソバを食おう、揚げたてのトンカツを食おうなどと妄想に耽る。

樋内さんのことも脳裏に浮かんだが、驚くほど欲望が湧かなかつた。以前だったら樋内さんを想うとむらむらしたものだが、今はソバやトンカツを想像してむらむらする。

ま、人間突き詰めると食欲だよな。性欲なんてのは、満足にメシを喰っている人間の贅沢な悩みだ。

それから十分くらいして、ふたたびドアを叩く音が聞こえた。先ほどの乱暴なノックと違い、こつんと遠慮がちな叩き方だ。

「キミはさっきの……」

こわごわと入ってきたのは、おれを蹴飛ばした暴力少女だ。

少女はベッドわきに歩み寄ると、申し訳なさそうな表情で「メルチ」と謝罪した。

「へ？」

おれがポカンとしていると、少女は聞こえてないと勘違いしたのか、ふたたび謝罪の言葉を繰り返した。

この待遇とこの謝罪からして、どうやらおれの冤罪は晴れたらしい。無実のおれを蹴飛ばしたのを申し訳なく思って、ごめんなさいをしに来たのだ。

「まあ、別に良いんだけどね……」

「？」

訝る少女に、おれは「怒ってない」と短く伝える。怒るを意味する「アガー」に打ち消しのターを加えて「アガーター」と発音する。まあ、実際は言葉が組み合わさると声調や発音が変化するから、とんちんかんな発音のはずである。日本語で言つと「怒るません」的な珍妙さだ。

けどまあ、日本語の怒るかもしれませんが意味は通じるし、実際、おれの気持ちは彼女に伝わったみたいで、少女はほっとしたように胸を撫でおろした。

しかし、幾つくらいの子なんだろうか。

おれは目の前の少女を眺める。

ごわごわした赤毛の髪はほつれ放題で、その下からハシバミ色の黒目がちな瞳が光っている。肌は乳白色の白さで、鼻から目もとにかけてソバカスが目立った。

背丈や体付きからして、たぶん十二歳かそこらだ。そのくらいの年齢でないと、あんな曲芸じみた飛び膝蹴りは不可能だ。

「ロア？」

ガンデのときとおんなじ方法で、おれは名前を尋ねる。

おれの単刀直入な質問に、少女は照れてくれたが、小声で「チリ」と名乗る。

「チリ？」

おれが念押しすると、少女はこくんとうなずく。そこでおれの名前も教えた。

「クドウー？ ミヤト？」

「工藤ね。語尾伸ばさない」

チリが不思議な顔で、二つの名前を繰り返す。言葉の響きが奇妙なのはもちろん、どっちが名前で姓なのか判別がつかないのだ。

説明したいけど、これをうまく教えるのはおれの語学力ではまだ難しい。なので好きな方で呼んでいいよ、と伝える。

「ミヤト！」

少女は笑顔でそう口にする。

不意に名前を呼ばれ、おれはどきっとした。

わ、わるくないぞこれ。

日本では、従姉の姪っ子にすら工藤さんとよそよそしく呼ばれるこのおれが、可憐な少女に下の名前で呼ばれるとは。

正直、照れる。

おれが照れ笑いしたをみて、チリは猛烈な勢いでぺちやくちゃ話しました。

「わわっ、ごめん分かんないんだ」

おれが待ったをかけて、言葉が難しいです早すぎです、と泣きを入れると、少女はその困り顔がおかしかったとみえて、ころころと朗らかに笑った。

よく笑う子だなあ、と試ってみていると、少女は着ている服（タコイズブルーを基色とした更紗の民族衣装だ）のたもとからオレンジを取り出した。

どうやら果物を剥いてくれるらしい。手を怪我しないといいけど、などと子供の包丁捌きを見守る父親のような気持ちしていると、少女から笑顔が消え、刹那、弓のつるをひき絞るような緊張が漲る。

「えっ？」

おれは思わず目を瞠る。

少女は腰から短刀を引き抜くと、手のひらのオレンジを目にも止まらぬ早さで四分割にした。

手もとが狂えばそのまま指を落としてしまうほどの勢いで、正確に果物を刻んだ。

呆気にとられ、笑顔に戻って差し出されたオレンジをまじまじと見つめる。

な、何者なんだこの子。

甘酸っぱい柑橘類で口を一杯にしながら、おれはただただ驚愕した。

「チリ、入るよ」

「あ、アルナー」

三度目の来訪者は、ノックさえしなかった。ガチャとドアノブがまわされ、おれの行く手を阻んだ優男が顔を覗かせる。

アルナーと呼ばれた男は、例の柔和なまなざしでおれを見つめる。
「……………」

男の目に宿る微かな不審の念を、おれは感じ取る。明らかに警戒している。泥棒ではないにしろ、どここの馬の骨かも分からん不審者、くらいには思われている。

アルナーがチリに何事が言う。それを聞いてチリが声を荒げる。
アルナーが眉をひそめてさらに訴える。チリがぶんぶんと首を横に振る。

どこまで行ってもおれは蚊帳の外だ。ネイティブ同士の会話は早すぎる。

最初、小声で言い争っていたが、やがてアルナーの方が折れたらしく、別の提案を持ち出した。

チリは半信半疑で「ホント？」と尋ねた。これはおれでも聞き取れた。それからまた早口で、アルナーに矢継ぎ早に質問をした。

次つぎと飛んでくる質問の山に、アルナーが肩をすくめながらしやがれ声で答える。

一体、何の相談をしてるんだか。

たぶんあまり歓迎できない話題だ。おれの処遇について決めている。十中八九、このまま街の衛兵に突き出される運命だ。

正直、どんな目に遭わされようと、もう気にならない。煮るなり焼くなり好きにしてくれってかんじだ。

おれが諦念半分、腹立ち半分であぐらを掻いていると、向こうでも話がまとまったらしく、アルナーが膝を打って立ち上がった。

「ゆっくりしてて」

そう言うと、チリとアルナーは連れだって部屋から出て行った。

果たして、おれはどうなるのか。

それから三十分が経ち、これはいよいよ年貢の納め時か、と覚悟をしかけたとき、チリがちょこちょこ小走りで戻ってきた。

「ごはん」

「ごはん？」とおれが聞きかえした。

「うん、夜のごはん」

チリはおれの手を取ると、宿の食堂に案内してくれた。

おんぼろの粗末な宿だが、日に二度、追加料金を支払うと食事を出してくれるのだ、とアルナーが手ぶりで説明してくれた。

厨房を覗き込むと、オークのような豚面のおかみさんが鼻息も荒くポトフを煮込んでいるところだった。

「あの、おれ金なくて」

おずおずと無一文であると告げる。

市場での騒動が頭をかすめるが、チリはにこっとして「お金、心配ない」と答える。奢ってくれるんだらうか。

そんなおれの不安は、だが食卓に供された食事を見たたん頭から吹き飛んだ。

湯気を立てるあつあつのポトフと、鉄串に刺した雉やしぎの丸焼き、それに藤かごに盛りつけられた堅焼きパン。

「ご馳走だ。」

紛うかたなきご馳走だ。

食卓につくや否や、おれは我慢できず串焼きにかぶりつく。脂の滴るジューシーな鳥肉にしゃぶり付き、パンを噛み千切り、香味野菜のポトフをごくごく飲み干した。

たまたま相席した、どこかの僧侶らしき坊さん連中は、食前のお祈りすら忘れ、食慾の権化と化したおれを険しい顔で睨んでくる。

少し腹がくちくなって、おれも思わずはっとした。いくらなんでも、こんな風にメシに飛びつくのは下品だ。

そう思っただらうと横を盗み見ると、アルナーが予想通りの呆れ顔を浮かべている。だが、坊さん連中に比べると、冷ややかな目つきではないのが救いだっただ。

「おー、ミヤトたくさん食べる。えらい」

「や、すまん」

「ううん、食べる食べる」

チリの方は、おれの食いっぷりに満足らしく、さあ食べもっと食べと勧めてくる。

「ま、食べなよ。せつかくだしさ」

アルナーが降参した様子で大仰に手をかざして夕餉を勧める。いちいち仕種が気障なやつだ。

が、おそらくこの会計は彼持ちのはずなので、そんな風に思ったらばちが当たる。おれは万言の感謝を並べ、手当たり次第に食べ物で胃袋に詰め込んだのだった。

翌朝、おれはチリとアルナーに連れられて、ユゴー市の中心部にあるプラハーへと連れて行かれた。もつとも、このときはプラハーが聖堂を指すとは知らず、おれの頭にはチェコの首都の名が浮かんだ。

「そのプラハーで何をする？」

「ミヤトとしゃべる人がいる」

「しゃべる人？」

おれが目をまるくすると、それが可笑しかったのか、チリも目をまるくする。十二歳にしてはなんだか精神年齢が幼い気がする。

まあ、おれも小六の頃は、毎日ゲーム三昧で鼻水垂らしてたから、チリのことなど言えた義理ではなかったが。

朝食を食べて宿を引き払うと、おれたちは商業区を抜けて城壁の中に入る。

発展めざましいユゴー市は、街全体が城壁からあふれているらしく、城壁の外にもちよつとした新市街が広がっている。

東京で言うところの山手と下町の関係に近く、城壁の内側は都市貴族や大商人、市参事や高位聖職者などの富裕層が暮らし、外側は商人や農夫などの新興住宅地が広がっているようである。

途中、鍛冶屋を覗きこんでアルナーに嗜められたり、路肩で馬糞を踏んでチリに笑われたりしながら、市の中心部を目指した。

「あれがプラハーか」

たどり着いたのは、木造の聖堂だった。門に二つの太陽を竜がぐるりと取り囲むレリーフが刻印されている。

「スーラだ」

アルナーが短く答える。

どうやら、スーラというのがこの土地の宗教らしかった。アルナーの断片的な説明によると、スーラというのは「われらが支えとな

る太陽」を意味するらしく、要するに土地に根ざした古くからの素朴な太陽神信仰が発展したものであった。

中に入ると、どこからともなくンジャーのにおいがした。手水鉢の中に生姜と月桂樹が漬け込んであるのだ。

それで手を洗い、おれたちは奥へと進んだ。

ミサの参列者が座る席が同心円状に並び、中央に祭壇がある。キリスト教の教会に似ているけど、中央に火を起こすためのやぐらがあるのが独特だ。護摩でも焚くのか。

祭壇わきの小部屋へと入る。そこは聖職者の控え室らしく、聖堂内の荘厳さに比べるとずっとアットホームな雰囲気だ。

「やあ、よくいらっしやいました」

「！」

部屋に入って早々、天井に吊した薄絹のカーテンの向こうから声をかけられる。

思わず呼吸が止まるかと思った。

「に、日本語がしゃべれるのか？」

「驚きましたか？」

カーテンが開き、中から顔を出したのは、六十がらみの小柄な中年男性だ。黒い祭服を着て、首から太陽と竜の紋章が描かれたメダリオンを提げている。

おそらく、彼がこの聖堂の司祭だ。中年太りで恰幅が良かったが、下卑た印象はまるでなく、垂れ下がったまぶたから覗く青い瞳は少年のような知性と好奇心を宿している。

「初めまして。貴方がアルナーの言っていた異世界からの来訪者ですな」

「ええと、その」

おれはたじろぎ、言葉を濁した。

彼らには、おれの正体は明かしてない。なのに、どうして気づかれたんだらうか。

「アルナーは、色々と複雑な経歴の持ち主でしてね。おそらく、貴

方の言葉遣いから正体を推理したんでしょ」

おれのもの問いたげな視線に気づいたのか、司祭は軽く説明をした。が、奥歯に物の挟まったような口調だ。

「自己紹介が遅れました。わたくしはこのスーラ正教ユゴー市教区を預かる、コホという者です。以後お見知りおきを」

「おれは……工藤宮人だ」

「工藤さんですね」

コホ司祭はおれの名前を正確に発音した。

それから、おれたちは客間に通された。簡単なテーブルに座ると、コホ司祭の奥さんという女性がお茶を淹れてくれた。

「又ギー茶です。体が温まりますよ」

出されたのは、お茶に又ギーという家畜の乳を入れたものだ。チヤイに似ているけど、ほんわかとした甘酸っぱさがある。口の中がべとべとしないので、おれは好きな味だ。

「なあ、貴方は何者なんだ？」

「ただの司祭です」

「日本語はどこで習ったんだ？」

おれの問いにすぐには答えず、コホ司祭は間をおいておれを見つめる。

三十秒ほど凝視され、お尻がむずむずしてきた頃、ようやく口を開いた。

「似てますね」

「誰と？」

「……わたくしに日本語を教えてくださいました方に、工藤さんはたいへんよく似ておいでなのです」

コホ司祭は乳茶を一口啜ると、おもむろに昔話を始めた。

「今から三十年ほど前になりますか。冬の夜、今にも凍え死にそうな男性が、この聖堂へと運びこまれました」

市の自警団の青年が、川つぶちで行き倒れている男を発見した。

年の瀬のことで、市の診療所に余裕がなく、救貧院も手一杯だった

ため、やむを得ず聖堂へと搬送した。

「わたしと妻は、彼に誠心誠意手当てを尽くしました。その心がわれらがスーラの御心に通じたのでしよう。彼は一命を取り留め、息を吹きかえました」

意識を取り戻した男性は、イコマ・ソーキチと名乗ったそうである。

「イコマ？」

「ええ、最初はひどく奇妙な名前だと感じました。どこかわたくしの知らない、遠い異国の人間だと思っていました」

生駒宗吉、だろうか。どうい漢字をあてはめるのかは不明だが、彼が日本人なのは間違いない。

「彼はコデン・マチヨという町の生まれで、シャフという仕事をしていると言っていましたね」

なんだそのモヘンジョダロ的な地名は。

と一瞬唖然としたが、よくよく考えると小伝馬町だろうと気づく。シャフは車夫で、すなわち人力俵だ。

ってことは、その宗吉というのは、相当昔の人間だ。明治大正、

あるいは江戸時代の人間の可能性すらある。

「たいへん礼儀正しく、大人しい男でした」

コホ司祭が目を細めて述懐する。

生駒宗吉もまた、おれとおなじような運命でこの世界に導かれた一人だった。

仕事で江戸の町を走りまわる彼は、あるとき千駄木の方へと向かう客を送り届けたあと、何かの弾みで井戸に落下した。

おれと違い、厳寒期の川に転移した哀れな宗吉は、寒さに凍え、川べりで気絶してしまったのだ。

「その後、行くあてのない彼を聖堂に置き、小間使いとしての仕事を与えました」

最初はひどく戸惑い、しきりに元の世界に帰りたがった宗吉だが、何年も暮らすうちにこの世界に慣れ、土地の女性と結婚してそれな

りに幸せに暮らしたそうである。

「ふうん、それでその宗吉さんは？」

「残念ながら、十数年前に亡くなりました。彼の亡骸は街のはずれの共用墓地に埋葬しました。良かったら、明日にでもご案内しますか？」

「ぜひお願いします」

おれはうなづく。

おれ以外にも、この世界に来た日本人がいるのを知って心強く思う反面、彼が一生元の世界に戻れず、ここで一生をすごしたという話を聞いて暗澹たる思いがした。

「じゃあ、その日本語は宗吉さんから教わったんですか？」

「はい、彼は大変知性に富んだ好人物で、わたくしに日本語のイロハを教えてくださいました。またこうしてお話できる相手ができてたいへん嬉しく思います」

コホ司祭はにつこりとする。

語学に興味のある彼は、この界隈の公用語（低地ノルド語というらしい）以外にも、異国の言葉を幾つか習得しているそうである。

どこの世界にも語学オタクというのはいるもんだ。おれの高校にも、語学好きが高じて東京外語大に行ったやつがいる。同窓会で会ったら、英語のほかにドイツ語とスペイン語までしゃべるから度肝を抜かれた。

コホ司祭も、なみなみならぬ熱意と努力を持って日本語を習得した。宗吉が亡くなってからずいぶん経つのに、これだけ流暢にしゃべれるんだから大したものだ。

「失礼ですが、工藤さんは今後の予定は？」

「なんもないです」

「でしたら、わたくしどもの聖堂にしばらく滞在なされてはいかがですか？ 工藤さんがよろしければですが」

「良いんですか？」

「ええ。こうして知り合えたのも何かの縁です。寒々とした場所で

申し訳ありませんが、是非泊まって行つてください」

「ありがとうございます！」

おれが深々とお辞儀すると、向こうも丁寧にこうべを垂れた。おそらく宗吉からジャパニーズオジギを習得したのだ。

「良かったな、クドウー」

アルナーが素っ気なく言った。まるで無関心な風だが、その彼が司祭と引き合わせてくれたのだ。意外とツンデレなんだろうか。

「また来るからね、ミヤト」

別れ際、チリが名残惜しそうな顔をした。

なんだか懐かれてしまった。

別に子供好きというわけではないのだが、昔から妙に子供に好かれるところがある。母親からは「あんたが子供っぽいから、同類だと思われててんのよ」とよくからかわれた。実際、当たってる気がする。

「今度、どこか遊びに行こうな」

「うん、行く行く！」

頭を撫でるとチリが無邪気に喜んだ。

そんなこんなで、バイバイと手を振るチリとアルナーを門のところで見送ると、おれは聖堂の中に引きかえした。

その日から、おれは聖堂に住み込みで働くことにした。

コホ司祭は話し相手になつてもらえたら十分だと言ってくれたが、お世話になつておいてタダメシを食うのは気がひける。

そこで薪割りや水汲み、家の補修などの男手が要る力仕事は、おれが率先して行うことにした。祭式関係は疎いから、せめて肉体労働で役立つと思つたのだ。

これほどの大都市なのに、聖堂内で寝起きしているのはコホ司祭夫婦だけだった。

毎朝、通いの老婆が家事の手伝いをしてくれるが、信徒たちが帰宅した夜間は二人きりである。なので、夜になるとおれが夫婦の話

し相手を務めた。

「モッド&ベイリー」なる、チェスと囲碁を融合したようなゲームを行いながら、司祭からこの世界のさまざまな話を聞いた。

たとえば、このユゴー市はザリンスク領なる辺境領の一部らしかった。ザリンスク領の周囲にはツロ領やイヌバス領などの、小規模な六つの領邦が群雄割拠している。

ここから東へ数百リーグほど行くと、これら辺境六領の宗主国にあたるバニシア王国があるそうである。

「王都か」

「興味がおありで？」

「王都に行ったら、元の世界に戻るための手がかりが得られるかと思っつてね」

「なるほど。しかし今のご時世、貴方のような御方が王都に入るのは難しいでしょう」

コホ司祭が 騎士 の駒を動かしながら難しい顔をした。

なんでも、バニシアの王都では、近年賤民排斥運動が盛んで、身分を持たない人間は門前払いされるとのことだ。

「以前は王国内のみでしたが、ここ最近はこのユゴー市でも浮浪者や物乞い、ジプシーを排除する動きが盛んでしてね」

「ああ、どうりで」

おれは合点がいつてうなずく。

わざわざ毒入りの酒まで用意して浮浪者狩りを行うからには、何か理由があるとは思ったのだ。王のお触れで、この辺境の地でも奇烈な弾圧が始まりつつあったのである。

「何か手はないもんですかね？」

おれが 放浪学生 の駒を 君主 の駒の前に詰めると、コホ司祭はうつむとくぐもった声をあげる。

「やはや、工藤さんはお強いですね」

「まあ、ルールが単純ですし」

将棋はそこそこ指した覚えがある。むしろ、おれが強いのではな

く司祭が下手と言うべきだ。数手前なら、十分対応できたのを見過ぎたのだから。

「王都に入るのは難しいでしょうが、情報を集めるだけなら各地をまわるのが一番でしょうね。ほかに貴方や宗吉のような、異世界人の話を聞けるかもしれませんから」

「気の遠くなる話だな」

「お力になれなくて済みません」

コホ司祭はこめかみに手をやると、長考をはじめた。

ゲームを始めて三日目の初心者に負けるものかと、聖職者らしからぬ負けん気でもって盤面を凝視している。

おれはゲームへの集中力を切らし、漫然と窓の向こうを見やる。

木の板でつつかい棒をしただけの粗末な窓の外から、夏の虫の鳴き声が聞こえた。

【009】 旅の一座

聖堂に厄介になって、早くも二週間の月日がすぎた。

毎日、午前中は聖堂内の細々とした雑務をこなし、午後はコホ司祭から低地ノルド語の手ほどきをみっちり受けた。

この頃には、おれもある程度耳が馴染んできていたし、コホ司祭が抜群の教え上手だったこともあって、一週間そこらで基本的な会話はマスターした。

やはり相手が日本語を話せると、語学の勉強も捗る。意思疎通が不十分だと、ガンデのときみたいな苦勞を強いられる。質問をして即答えが返ってくるのがこんなに有難いとは思わなかった。

日中、おれが聖堂の前の掃き掃除をしていると、よくチリが遊びに来た。

「おー、ミヤト頑張ってる」

「よおチリ。相変わらず元気そうだね」

「パン持ってきたよ」

「パン？ あの市場の店の？」

「うん。市場の人たちが、疑って申し訳なかったって。はい、これお詫びの品ね」

バスケットには、さまざまなパンが詰め合わせになっている。あとで司祭の奥さんに渡したら、たいそう喜ばれた。

あの日、おれを蹴り飛ばしたあと、チリたちは詳しい事情をパン屋のおやじから聞いたらしい。

なんでも、遡ること数日前、おれとよく似たような顔つきのこそ泥がパンを盗んだそうである。おれがパンを手を取ったので、味をしめてまた盗みに来たと早合点した。

よくよく見ると、最初の犯人とは似ても似つかないので、おれは無事釈放された。チリはおれを蹴飛ばした罪悪感から、宿へと運んでくれたのだった。

「そうだったのか。言葉が通じないと、余計な誤解を招くもんだなあ」

おれは頭を掻く。

今回は運良く助かったが、へたすると殺されていたかもしれない。そう考えると、この国の言葉を覚えるかどうかが生死に関わる。おのずと気合が入るうものだ。

「蹴ってごめんね」

「気にすんな。あんな風に追われてたら、誰だって本当の泥棒だと思っただろうしな」

「うん……ありがとね、ミヤト」

チリが照れ笑いを浮かべる。

その愁いを含んだ視線が妙に大人っぽい。子供なのか大人なのか、この年頃の少女はころころと見え方が変わるのが面白い。それだけ不安定な時期なんだろう。

「チリたちは花を買ってたんだよね？」

「うん、播き花を選んでたの」

「播き花？」

チリによると、播き花というのは、旅芸人が芸を始める前に、舞台の周囲に播くための花らしかった。ニアやガーベラ、コランパンジーなどの安価な花を散らし、通行人の注目を集めるのだという。

「チリは旅芸人なの？」

「そうだよ。あれ、言わなかった？」

「ううん、初耳だ」

「わたしとアルナーと、団長のドメスの三人で芸をしながら各地を旅してるの」

ざらめをまぶした焼きたてパンをうまうま頬張りながら、チリがえへんと胸を張る。

彼ら三人は、宵熊座なる旅芸人の一座だった。ドメス、というのはおれが後ろの貞操の危機を感じた、あの山賊風のガチムチおっさんのことだ。

「じゃあ何か芸できるのか？」
「できるよ」

口もとのべとべとを手の甲で拭くと、チリはここにこ顔でおれにクロワツサンを手渡した。

「これ、ミヤトと半分こね」

そう言うと、好きなタイミングでパンを空中に放り投げてくれ、と頼まれた。

「じゃあ行くぞ」

おれは言われるがままに、クロワツサンを空高く打ち上げる。

と、チリのつぶらな瞳が細さを増した。

「たあっ！」

可愛らしい掛け声と共に、チリは腰の鞘から目にもとまらぬ速さでナイフを抜き撃ちする。

ナイフは回転するクロワツサンを空中で二つに裂き、分裂したパンの片割れがおれとチリの手のひらに見事収まった。

「凄げえ……」

「おそまつさまでした」

チリが半分のクロワツサンをくわえながら、飛んでったナイフを回収しに走る。

若干十二歳ながら、チリは天性のナイフ投げ師だった。頭上の林檎はおろか、空中を飛ぶ蝶々ですら、針の穴を通す精度で撃ち落とすことができるという。

同様にアルナーは曲芸師、ドメスは火吹き男として観客をわかせるそうである。

「良かったら、次の公演観にきて」

「うん、絶対行くよ」

「えへへ。気合入っちゃうな」

ナイフをくるくるまわしながら鞘に収め、チリはまんざらでもなさそうだった。

早めにお勤めが終わると、おれはよく一人でユゴー市内をぶらぶらした。

外を出歩きやすいようにと、コホ司祭の好意で、おれの背丈に合った服を服屋で見繕ってくれた。

平織りのケープを頭からすっぽりかぶって、腰の部分を革バンドで留めただけのシンプルないでたちだ。どことなく古代ローマ市民を髣髴とさせる服装だ。

そのえせローマな服装で、おれはほとんど毎日市内を散策した。せつかく異世界に来たのだから、この世界の風景や文化を観ておかないと詰まらない。

王室御用達を謳う仕立屋や火の粉が飛び交う鍛冶屋、疲れた顔の女工が紡糸機のペダルを踏む製糸工場など、ユゴー市の主要な産業の現場にちよこちよこ顔を出した。

比較の対象として適切かは分からないが、ユゴー市の文化レベルは、産業革命前夜のイギリスのような印象だ。まあ、世界史に疎いおれの印象などあてにはならないが。

そうやって各施設を訪ね歩いたが、もちろんほとんどの時間は市街地ですごした。

聖堂の手伝いで、コホ司祭から心許りの手間賃をもらったので、その金で高台のカフェーに入り浸り、ヌギー茶や濃いめのカフェを飲んで眼下に広がる市街地を眺めた。

約一ヶ月間に渡る聖堂での生活の中で、一番多く通い詰めたのは住宅区にある閑静な共用墓地だろう。

行き倒れの浮浪者や賤民などが埋葬される一角に、生駒宗吉の墓はあった。

ほかの墓とおなじ形状だが、墓碑に刻み込まれた拙い生駒宗吉の漢字四字が哀愁をそそる。生前、死を覚悟をした宗吉が、自らの墓に刻む名前を瀕死の床で一筆書き、それを石工に頼んで刻印してもらったそうである。

おれは宗吉の墓前に立ち、掃苔をして水を濯いだ。コホ司祭が手

入れをしてくれているので、墓は比較的きれいだ。

だが、この世界の人間は墓石に水を濯いだりはしない。本当はスーラ式にやるべきなんだろうが、構うものか。水を濯ぎ、お線香代わりに市場で購入したお香を焚き、故人の冥福を祈る。

宗吉さん、あんたとおなじ国の者だ。

あんたも、さぞかし元の世界に帰りたかったんだろうな。こんな異世界で果てて、さぞや無念だったろう。

黙祷し、お香の火を消して立ち去る。花を買い忘れてしまったので、次来るときは持ってこようと思いつながら。

月の半ばのある日、おれはチリに誘われて宵熊座の公演を観に行くことにした。

公演、と言っても大規模なサーカスとは違い、もっぱら広場で催される。

ユゴー市には南天、北鯨、東蘭の三つの広場があって、彼らはその広場を順番にまわって公演を行う。

おれが向かうと、すでに北鯨広場には人だかりが出来ていた。本当はもつと早く行く予定だったのだが、聖堂の物置の修繕に手間取ったのだ。

「さあさあ、街の皆さん寄ってらっしゃい見てらっしゃい。半年にわたる興行の旅から戻ってきた、われら宵熊座の芸をとくとご覧あれ。お代は見てのお帰りだ」

アルナーの前口上が広場に響きわたる。少し潰れたハスキーな声が、騒然とした広場の中でよく通る。

声質自体はチリの方がいいが、うるさい場所では掻き消されがちだ。その点、アルナーのだみ声は賑やかな場所こそ、独特の存在感を持つ。

なので、チリは花を播く仕事をしながら、近くの観客の足を止めるのに腐心している。今日は普段の青い民族衣裳に、金属の腕輪や足輪を嵌め、鈍く光る銀細工の髪飾りをしている。目もとがきらき

らしているのは、貝殻を砕いた粉を塗布しているんだろ。

群衆の中に体をねじ込み、おれは最前列へと躍り出る。ここなら、彼らの演技がよく見える。

と、チリと目が合った。軽くウィンクしたが、すぐおれの存在を忘れたように別の群衆の方へ近寄って愛想を振りまく。

ドメスは相変わらずの山賊風の服装だ。彼の肩にはリスのような生き物がちょこんと腰をおろし、手に胡桃を持って可愛らしく首を傾げている。

ある程度、人が集まってきたところで、アルナーがドメスに開幕をうながした。

「えー、ではこれより宵熊座の公演を始めたく思います。ささ、みなさま、もっとお近くに寄ってください」

ドメスが妙にへこへこした姿勢で、ハイハイと手招きをする。厳しい大男がおどけるのが滑稽で面白く、客たちからくすくす笑いが漏れだした。

軽く笑いを取ったところで、一番手のアルナーが中央に躍り出る。ピエロが着るようなタイツを履き、信号カラーの胴着をその中にたくし込んでいる。この世界の軽業師の服装らしい。顔にドーランを塗らないのが違う点か。

アルナーが恭しく一礼すると、群衆から拍手が鳴った。ヒューという口笛や、女性ファンの黄色い声援がする。熱心な固定客が居るらしい。イケメンはお得だ。

女性ファンの声援に応え、投げキッスなんぞを方々に飛ばすと、アルナーは手慣れた様子で芸を始めた。

小手調べに、まずジャグリングを始めた。最初はボール、次は馬鈴薯、最後は松根油を染みこませた火球をお手玉してみせる。

燃えるお手玉には驚かされたが、よく見ると火をつける直前、腰の壺に両手を入れて軟膏を手のひらに塗った。

おそらくその軟膏が断熱材の役目を果たしているのだ。無論、それでも相当熱いはずで、よほどの技術の持ち主でないと、こんな離

れ業は不可能だ。

続いてボールの上に板きれを乗せ、その上にまたボールを置いて乗る。

よくある曲芸だが、アルナーはそれを目を閉じたままこなしてみせる。さらには、その上で逆立ちまでしてみせるのだ。

「おいおい、どんなバランス感覚だよ」

並みの人間なら、目を閉じて片足で立つのすら難しいのに、彼は難なくこなしてみせる。会場は拍手喝采だ。

方々から飛んでくるおひねりを、チリが藤かごに入れてキャッチする。こちらも、ランダムに飛んでくる小銭を落とすことなく次つぎとかごに受け止める。アルナーの超絶技巧が凄すぎて霞むが、こちらも地味にやる。

アルナーにつづいてドメスが登場した。

肩にいた小さなリスがととと、と彼の頭に上ると、そこできるとバク転をする。仕種の愛くるしさに、観客がほっこりとした。

ドメスは毛むくじやらの胸板をどんと拳で叩くと、腰に吊した革袋から、度数の高い酒を一気に口に流し込んだ。

そして手にした松明に向かって吹きつけると、燃え盛る炎が会場の周囲を包み込んだ。

「おお」

とおれは思わず感嘆する。

これだけでも賞賛に値するが、ここからが違った。ドメスは口の形を微妙に変形させることで火の流れを変え、空中に火のアーチを生み出した。

放物線を描く炎が、あらかじめ用意してあった木の輪に引火し、燃え盛る火の輪となる。

ドメスが合図を送ると、彼の頭上のリスがぴよこんと華麗に飛躍した。

リスは火の輪を見事くぐると、チリの胸にすんと着地する。チリが大きく腕を振ると、リスは「ちち！」と鳴いてアピールした。

「さあ、続きましてはわれらが一座の紅一点、チェリア嬢によるナイフ投げを行いたいと思います。宜しければ、どなたか……」

アルナーは群衆の中からの的となる人物を捜すふりをした。が、おれの方を見てにやつと意地の悪い笑みを浮かべる。

「では、その貴方」

「おれ？」

「ささ、どうぞこちらへ」

アルナーに言われるまま、おれは広場の中央へと連れだされる。

「お、おいアルナー」

「動くなよ。普段ならサクラを使うんだが、今日はあいにく不在だね。難易度高いやつやるから、下手に動くと思えど死ぬぞ」

「なんだと？」

物騒な脅しをされ、おれはすくみあがる。

「さあ、この勇敢な若者に盛大な拍手を！」

アルナーがにこやかに拍手を求めると、群衆からはわーわーと拍手が鳴った。こうなると今さら後へはひけない。

どうやらおれを選びだしたのは、アルナーの独断らしい。チリが虚を衝かれた顔をしたが、すぐに不敵な微笑を浮かべる。

「だ、大丈夫なのか？」

おれは脂汗を垂らしながらチリの十五メートルくらい前に立った。アルナーは手際よく、三つの林檎をおれの頭上と両肩にのせてゆく。まさにテルマストダイな危険度だ。

「おい、近すぎだろ」

「そうだ。だからずれると喉が切れる」

ひい、とおれは内心悲鳴を押し殺した。

チリは三本の投げナイフを指に挟み、おれとの距離を見計らい、慎重に狙いを定めた。

「ま、まあチリの腕前なら安心か。」

そう思った瞬間、チリはあるうことか、くるりと後ろを向く。的の方を見ないでナイフを投擲するつもりなのだ。

や、やっぱ死ぬかも……

極限の恐怖に股間が緩んだのか、下着が少しぬれる。じわぬれだ。息詰まる静寂が場を包み込んだ。

チリは微動だにしない。

少し風にあおられて弾道が狂ったら、喉にぶすつと刺さる。チリもそれは承知しているらしく、風が止むのを待っている。

固唾を呑んで見守る群衆。

薄笑いを浮かべるアルナー。

ドメスの肩でリスが「ちー」と鳴く。

このままずっと風が止まなかったらいいのに、そうしたらいくらチリでも無理だと判断して投げるの

「行きます」

チリがそう宣言し、おれが身構えた瞬間。

目にも止まらぬ速さでナイフが射出された。おれの目には、投げる予備動作がほとんど見えなかった。

何かが飛んでくる風圧を感じた、と思ったら、頭上と左右にさくさくさく、とナイフが命中する快い音がした。

林檎の果汁が滲みだし、甘酸っぱい香りが周囲に立ちこめる。

「は、ふ……」

息を吐き、こわごわと喉に手を触れる。さいわい、頸動脈はぶつた斬られることなく無傷だった。

「おそまつさまでした」

チリが得意満面としてお辞儀をすると、群衆からは割れんばかりの拍手が鳴り響く。アルナーがかごを持ってまわると、みるみるかごが銅貨で満たされた。

「お疲れさん」

精根尽き果てて放心していると、アルナーが肩を叩く。

「安心しな。チリには内緒にしといてやる」

「あ、ああ……」

猫なで声のアルナーに、おれは内股気味で応じる。大成功だよー

と笑顔で手を振るチリの純真さがまぶしかった。

失禁こそしてしまっただが、おれのくそ度胸が認められたらしく、興行の日からアルナーの態度が軟化した。

というのも、当初はサクラがないので、簡単なナイフ投げでお茶を濁す予定だったらしい。だが、おれが逃げずに挑んでくれたので、難易度の高い技を実行したそうだ。

「まさか本気で受けるとは思わなかったよ。並みの神経なら、チリが後ろを向いた時点で辞退するだろ普通」

「あの状況で逃げられるかっての！」

「はは、けどあんたを見くびってた。後ろ投げの的になるクソ度胸は大したもんだよ。おれなら絶対御免だね」

「ったく、よく言うよ……」

おれはアルナーが注いでくれたぶどう酒を木のコップで受ける。興行の成功を祝ってドメスが奮発して酒を奢ってくれるというので、おれはありがたってお呼ばれた。

入ったのは場末の大衆酒場だが、宵熊座なじみの店だけあって、出される腸詰めも酒も美味かった。

「ミヤト、わたしを信じてくれた。だからわたしも安心して投げられたの」

チリがえへへと上気した笑顔を向ける。頬が紅いのは、おれたちに付き合っって一杯呑んだからだ。

「おい、顔真っ赤だぞ」

「うん、ちよっと酔っちゃった」

「未成年に酒を吞ませて平気なのか？」

「何か問題あるのか？」

アルナーがきよんとする。

どうやらこの国では子供の頃から酒を吞むらしい。正直感心しないけど、よその世界の文化に日本の法律を持ち出すほどバカでは

ないから黙っておく。

「チリ、そのへんにしときな」

ドメスがお酒を止めると、チリは「はい」とおとなしく酒盃を手放した。

「ふええ、ふらふらするよう」

チリはお冷やをこくこく飲むと、椅子を蹴って酒場の外に出ようとした。

「おい、どこ行くんだ」

「暑いから体さましてくる」

「あ、じゃあおれも涼んでくる」

心配なので、おれも慌てて席を立つ。

「ミヤトも酔ったの？」

「ん、まあな」

「大人なのにだらしないなあ」

チリがさも愉快そうに目を細める。その媚びを含んだまなざしが妙に色っぽく、おれは不覚にもどきっとした。

おれたちは店を出ると、繁華街の喧噪を離れて寝静まる夜の街をどこに行くでもなくぶらぶらした。

夏にしては空気が冷たい夜で、林の虫の音色がやけに鋭く聞こえた。街は墨汁をたっぷり含んだ筆で塗りこめたような闇に包まれ、点灯夫が灯す常夜灯のともしびが通りをうつつすらと照らした。

「ふう、風が冷たくて気持ちいいね」

「だな」

夜風に火照った体を冷まし、おれたちは声をひそめて広場を歩く。通りを一步離れると、そこはもう完璧な闇だ。おれはカンテラに火を入れ、足もとを注意深く照らし歩いた。

「ミヤトはよくお墓参りに行ってるよね」

「うん」

「誰のお墓なの？」

「何て言ったらいいかな。おれとおんなじように、この世界に来ちまった人の墓だよ」

おれはそう言いながら、腕をぱちんと叩く。蚊のような吸血性の虫がたかってくる。痒くならないのは良いけど、吸われる量が多く、叩くと自分の血が飛びちってぞつとする。

「わたしもね」

「うん？」

「わたしもね、こんな夜は、ひとりでお墓参りをするの」

「夜に？」

「うん。来て」

チリがおれの服の裾を引っばる。子供が父親を玩具売り場に呼ぶような仕種だ。

チリに連れられて、おれは広場の雑木林を抜ける。ランタンの光に蛾や羽虫がたかってくる。遠くからミミズクの啼き声がした。

「ここは？」

「わたしの家族のお墓」

そう言っつて案内されたのは、雑木林の真ん中の小さな空間だ。密集した林が途切れ、糸杉の隙間から満天の星空が覗いている。

見たところ、墓石らしきものはない。雑草の生い茂るただの林の中の広場だ。

「お墓はね、あそこなの」

「空？」

チリが頭上を指さした。

空気が澄んでいるのか、空には無数の星々がきしむような音を立てて輝いている。遠い昔に発せられた星の輝きが空一面にまぶされ、天蓋を清澄な光で満たしている。

「わたしね、みなしごなんだ」

チリが空を仰ぎながら訥々と語る。

チリの村は、六年前の内乱で襲撃され、親兄弟は山賊によって皆殺しにされた。侯領同士の情勢悪化によって、騎士団が留守をして

いる隙を狙われたのだ。

残忍な山賊たちは、命乞いをする村人たちを公会堂に集め、火を放って燃やした。

家の床下に隠されたチリだけが九死に一生を得たものの、異変を知ったツ口騎士団が駆けつけた頃には公会堂は全焼し、どれが誰の骨かすら分からない状態だった。

「だからね、本当のお墓はないの。あの大きな星がお父さんのお墓で、隣にあるのがお母さん。下に三つ並んでるのが妹と弟たち」

チリがひとつずつ、空に浮かぶ家族の墓標を指さしてゆく。

「わたし旅芸人だから、ずっとひとつの街にはいられないの。でも、空に浮かぶお星さまがお墓なら、どこにいてもみんなと一緒にいられるでしょ」

そう言ってチリはにこっとする。

家族が殺されて悲しくないはずがない。何年にも渡って泣いて泣いて泣き抜いて、もうとつくと涙が涸れ果てたのだ。

……強いな。

凜としたチリの横顔を眺めていると、元の世界に帰れないくらいで落ち込んでいる不甲斐ない自分を絞め殺したくなる。

それから、おれたちは林の中に腰をおろし、ただ無心で星空を眺めた。

どれくらい時間が経ったか、吸血昆虫にあちこち吸われ、手足が内出血まみれになった。チリがつうと顔をしかめる。

「あーあ、顔刺されちゃった」

「ひどい面だな」

おれはランタンをかざしてぶつと吹きだした。チリのほっぺたが、内出血で赤く腫れている。アルコールを飲んで来たから、二人とも虫どものいい標的だ。

「帰ろうか？」

おれがうながすと、チリは小さくこくんとする。そしておれの体にぴとつとくつつく。

「なんだよ暑苦しいな」

「だって足もと暗いんだもん」

「ランタンで照らしたら見えるだろ」

「ちえ、詰まんないの」

チリがぶうと頬を膨らませる。

やれやれ、まだ酔ってるんだろつか。

でもま、今夜くらいは優しくしてやるか。

おれはチリの華奢な腕を取ると、夜の市街地をのらくらと歩いて戻る。

しかしこの姿、アルナーに目撃されたらロリコンだと誤解されそうだ。居酒屋に入る前に理由をつけて離れなくては。

「転移石？」

手斧を構えながら、おれはコホ司祭の方を注目した。

のどかな昼下がり、おれが仕事に精を出していると、司祭がひよっこり顔を出した。

「左様、転移石です」

コホ司祭は巨大な切り株に腰をおろし、日向ぼっこをしている。

近ごろ関節痛がひどいとかで、仕事の合間を縫ってこうしてお日さまを浴びに来る。

「その転移石ってのは何なんだ？」

おれは呼吸を整えると、台座の丸太めがけて斧を振り下ろした。

かっこん、と乾いた音がして、薪が真っ二つに割れる。

最初のうちは斧が薪に食い込んで取れなくなったり、盛大にはずしたりしたが、一ヶ月近くも薪割りをこなしていると、それなりにさまになってくる。手のマメも出来ては潰れ、次第に皮膚が厚さを増した。

「貴方に異世界に還る方法を尋ねられ、あれからわたくしも旧帝政時代の文献や書誌をあたってみました」

バニシア王国の先王が病歿し、現王の時代に成り代わってから、

国立書院に収蔵された文書類を請求しやすくなったそうである。

「かつて宗吉に頼まれて何度か調べたのですが、当時は禁書扱いの書籍が多く、たいした手がかりは得られませんでした」

新たに解禁された書物を調べるうち、コホ司祭は古代帝政期に用いられた朮石にまつわる資料を発見した。

「その中に転移石に関する記述があったのです。おそらくこれこそ

……」

「待ってください。その朮石ってのは？」

「ああ、やや性急すぎましたな。朮石というのは、古代の呪術が封じ込められた稀少な石です。をけら石とも言い、その石を手に念じると、所有者に摩訶ふしぎな力をもたらすと言われています」

なるほど、とおれは相づちを打つ。

「転移石は空間と空間を繋ぐ力があるとされています。帝政全盛期には、その技術が盛んに研究され、大学では転移学なる独自の朮石大系にまで発展したそうです」

「ずいぶん大がかりだな」

「瞬間移動というのは、誰しもが夢見る技術ですからね。もし本当にそれが可能なら、この世界の覇権を握ることすらできます」

だが、実際はそうはならず、調査報告書のたぐいは書庫の奥深くに封印された。

「転移石の技術が忘れられてしまったのは、主に二つの理由からでしょうね。一つは政治的な理由。もう一つは技術的な理由」

「ああ、そうか。そのなんとか石ってのは、滅亡した国の技術なんだよな。となると、研究結果の類は極秘資料として内密に処分されて当然だよな」

「ご明察です。転移石のみならず、朮石に関する調査研究の大半は失われました。むろん彼ら自身が敵国の手に渡るのを怖れて処分したのもありますが、直接の原因は、バニシア王国の開闢王であるフエスタス二世による宗教弾圧によるものです」

「弾圧？」

「数百年ほど前までは、この地はスーラ信仰がありませんでした。そこでスーラの教えを根付かせるため、フェスタス二世は土着の宗教に容赦ない弾圧を加えたのです」

開闢王は朮石技術を邪教の暗黒魔術であると断定し、研究者の処刑や資料の焼却などを積極的に推し進めた。

「なるほどな。それで、もう一つの技術的な理由ってのは？」

「転移の技術は未完成のままだったようなのです。文献によると、所有者の想定した場所から位置がずれるケースがたびたび発生し、それで研究が頓挫したようです」

「ずれる程度なら十分実用可能だろ？」

「完璧な平地なら問題ありません。しかし、実際の土地というのは、意外と起伏や障害物があるものです。たかが数リーグとて、誤差が出るのは致命的です」

なるほど、石の中に転移してしまつたら、出るにすられず窒息する羽目になる。誤差によるニアミスを考えると、実用化には課題が多そうではある。

「しかし、その転移石つてのが、一体おれと何の関係があるんだ？」

「大事なのはここからです。転移実験を行った者の十人に一人が、この世界から姿を消してしまつたというのです」

「この世界から？」

コホ司祭が重々しくうなづく。

「転移喪失、と呼ばれる不可解な現象がたびたび発生しました。ただ単純に転移に失敗して所有者が死亡する不幸な事件もありましたが、転移喪失の場合、所有者の痕跡が完璧に消えてしまつたというのです」

「……」

コホ司祭の瞳が好奇心にきらつく。

「ここから先は、わたくしの単なる憶測にすぎませんが、転移喪失者たちは、こことは別の世界に飛ばされてしまつたのではないのでしょうか？」

「異世界へ？」

「ええ。貴方や宗吉のように、まったく文化や言葉の異なる世界へ飛ばされたのです」

「だとすれば、その転移石を手に入れたら、元の世界に戻る方法が見つかると？」

「断定はできません。あくまでわたくしの推論ですからね。ただ、クドゥーさんが元の世界に還りたいと強く希うのなら、やみくもに動きまわるより、転移石を求めるのが上策ではないかと思うのです」

コホ司祭は静かに目を細め、さんさんと降り注ぐ日射しを手ひさしで遮る。

「これからどんどん日が短くなりますな」

「はあ」

唐突に話題を変えられ、おれは曖昧な生返事をした。

「では、用事があるので失礼します」

「おれは残りの薪を割っておきます」

「よろしく願います」

コホ司祭は祭服の裾を捌いて立ち上がる。

もう少し突っ込んだ話をしたかったが、用事があるなら仕方なかった。

その日の夕方、高台のカフェでカフワをがぶがぶ飲んでチリが来るのを待っていると、かつたるそうな顔つきの優男がふらふらと近寄ってきた。

「ようクドゥー」

「アルナーか。珍しいな」

よくおれの居場所が分かったもんだ。

と思つたらおれの考えを読まれたのか、

「残念だが、チリは来られない。腹痛で宿の便所にこもっちまっつね。あの様子だと、今ごろ脂汗垂らして白目剥いてんな」

「大丈夫なのか？」

「心配要らん。単なる食アタリだ。出すもの出したらケロツとするさ」

アルナーはおつに澄ましてウェイトレスの女性を呼び止めると、アプリコットジャムを落としたり又ギー茶を注文した。

「今夜、チリと演劇を観に行く約束だったんだろ。楽しみにしてたみたいだぞ」

「そうか。可哀想をしたな」

前々から二人で遊びに行く約束をしていたのだが、なかなか予定が折り合わなかった。そこで今晚、公演中の演劇を観に行くはずだったのだ。

「ま、代わりにおれが付き合つてやるよ。有難く思つんだな」

「野郎とデートする趣味はないね」

「小さな女の子とならデートするのかわ？」

アルナーに鋭く切りかえされ、おれは言葉を失う。下手な皮肉でカウンターパンチを食らうとか、阿呆かおれは。

「ま、おれも芸人のはしくれとして、演劇には興味がある。あんたが来ないんなら、おれ一人でも観に行くがね」

「いや、行くよ。おれも暇してるから」

このまま辛気くさい聖堂の寝所に入るのは詰まらない。この世界に来てからネットもテレビも断たれ、ただでさえ娯楽の少なさに退屈しきっているのだ。

その点、秋の夜長に演劇を観に行くのは恰好の気晴らしになる。たとえチリと一緒にでなくともこの好機を逃す手はない。

「やれやれだな」

「そう辛気くさい顔をするな。こちらら、美女を連れて観に行けるならそうするさ」

「ならそうしろよ。あんたなら意中の女の一人や二人居るんだろ」

このイケメンめ、とおれがやつかみ半分で言うと、アルナーは苦々しく鼻を鳴らした。

「はは、本気でそう思ってるならお笑いぐさだね。旅芸人がモテるたあ傑作だ」

「違うのか？」

おれが真顔で尋ねると、アルナーは毒気を抜かれた様子で肩をすくめる。呆れと戸惑いの混じった微妙な苦笑をうかべた。

「ま、世の中知らん方が良いこともある」

「なんだよそれ」

「無知なる者は幸いなるかな、だ」

謎めいた一言を発すると、アルナーは運ばれてきたヌギー茶をごくごく飲んだ。あつあつのお茶なのに平気なのか。

アルナーの案内で、おれはユゴー市の城壁に接した野外円形劇場に足を運んだ。

「この円形劇場は、帝政時代のもんでね。こんな場所にあるから市壁と干渉して、半分埋められちゃった」

「へえ、なんだか勿体ないな」

見事な彫刻の施された古代の壁画を、無骨な石積みみの壁で削るのは文化的侵略だ。おそらく施政者もそう考えたからこそ、あえて劇

場を半分壁で埋めるような暴挙に出たんだろう。

おれたちは半円形の劇場に入ると、前の方の席に腰をおろした。

「チチツ？」

「ん？」

ふとアルナーの腰の革ポーチがもぞもぞとうごめき、中からこぶしほどの大きさのリスが首を出した。

朝顔の種のような黒目、ぴんと尖った耳、茶褐色の艶やかな毛並み。リスよりはジャンガリアンハムスターに似ている。もふもふしてて反則級の可愛さだ。

「ああ、こいつはトト。われら宵熊座の広報担当の煤リスだ」

「煤リス？」

「ちよつと触つてごらん。大丈夫、噛みつきやしないから。根っからの臆病者なんだ」

アルナーに言われ、おれはトトの後頭部を指でちよんと小突いた。「チツ！」

突然触られてびくつとしたのか、トトは頬袋を膨らませると、口から黒くもやもやしたものを吐きだした。

「わっ、なんか出したぞ！」

「これが煤リスの名前の由来さ」

煤リスは自らの老廃物を頬袋に溜め、それを口の中で乾かして粉状にする習性がある。天敵に襲われたときや危険を感じたときは、その粉を吹きだし、相手が驚いた隙に逃げるそつである。

「へえ、可愛いな」

おれが親指でほっぺを撫でると、トトはむにゅと変な顔をした。「ちよつとやめてくださいよ」的な迷惑げな表情だ。

「普段はドメスが世話してるんだが、あのおっさん、今日は珍しく多忙だね」

「何かあるのか？」

「商工会議所に呼ばれたらしい。市内での興行に関する取り決めが変わるんだとさ」

市参事会員も出席する公的な会議なので、小動物は連れ込めない。そこで一時的にアルナーがトトを預かっているのだ。

「ほれ、中に入れ。劇が始まるぞ」

アルナーがクコの實でトトを釣って、上手く革ポーチの中に誘導した。

客席の喧噪が収まって、舞台袖で役者や演出家たちが小声で囁き交わす気配が伝わってくる。

屋内劇場と違い、舞台壇や緞帳などがないので、舞台袖の動向がよく見える。

やがて劇団の主宰兼座付き作家とおぼしきカイゼル髭の男があらわれ、開幕の挨拶を述べた。劇の見所や、大まかなストーリー展開などをあらかじめ説明する。

金曜ロードショーかよ、と思わず突っ込みたくなるが、普段から創作物に慣れ親しんでない一般市民は、物語を咀嚼するのが難しく、途中で筋が判らなくなるんだらう。

今宵の劇「新メイリオ」は、所謂古典悲劇を作家がアレンジしたものだ。

舞台は帝政末期、フォントのような名前の美姫メイリオは、敵国の皇子アンコルドに一目惚れする。

叶わぬ恋と知りつつも惹かれ合う二人。メイリオはアンコルドに一目逢うため、旅の女騎士として皇国に潜入する。

しかし、時の皇帝の妾である毒婦クロテイルテによって、メイリオの変装は見破られてしまう。クロテイルテはメイリオを捕らえ、剣闘士として闘技場に送り込む。

剣の腕に覚えのあるメイリオは、闘技場で並み居る敵をなぎ倒しながら、必死に観覧席のアンコルドに自分の正体を伝えようとする。

だが、彼女の叫びは何万もの群衆の熱狂的な声援によってかき消され、彼女は為す術もなく剣を血で濡らしてゆく。

やがて最終決戦、メイリオはクロテイルテの放った毒爪を装着したトラによって無惨にも切り裂かれる。

素肌をさらしたメイリオに、アンコルドはようやく剣闘士の正体に気づき、血まみれの彼女のもとへと駆け寄る。

だが、再会の甲斐もなくメイリオは間もなく毒によって息絶える。アンコルドは逆上し、自らの剣でクロテイルテを殺害する。

妾を殺された皇帝は激怒し、乱心したアンコルドを地下牢へと幽閉する。日の光の届かない地下で、アンコルドは嘆き悲しみ、日に日にやせ衰えてゆく。

「オリジナルの劇では、そのままアンコルドは死に、天来使に導かれてあの世でメイリオと結ばれることになる」

「なるほど」

だが、新メイリオでは結末部分に大胆なアレンジが加えてあった。毒で死んだはずのメイリオは、奇跡的に九死に一生を得る。医者から解毒薬を投与され、息を吹き返すのだ。

復活したメイリオは、部下を率いて牢獄を襲撃し、死亡したはずのクロテイルテ（じつは皇国を乗っ取るうと目論む邪悪な魔物だったのだ！）とスリリングな死闘を演じる。

激闘の末にクロテイルテにとどめを刺したメイリオは、衰弱したアンコルドを救い出す。追われる身となった二人はそのまま生まれた国を逃れ、身分や名前を捨てて愛に生きる決意をするのだった。

めでたしめでたし。

「なんだかご都合主義的な展開だったな」

劇がはねたあと、そろそろと劇場から出て行く観客の列に混じって、おれは小声で感想を告げる。

「ハッピーエンドの方が大衆ウケするからな。今日び古典悲劇は流行らん。誰が金払って暗い話を観たがる？」

「けどなあ。トラに襲われて瀕死の重傷を負いながら、数日後には牢獄襲撃の陣頭指揮を執るとか、メイリオ超人すぎるだろ」

「まあ、女って存外タフだからな」

妙に実感のこもった口調でアルナーが言う。過去、何かあったんだろつか。

「しかし、参考にはなつたよ。あの程度の小芝居なら、おれたちでもできる」

「できるって、芝居をやる気なのか？」

「まだ構想段階だけだね」

そう言つて意味深な微笑をうかべる。

「大道芸だけで食つてくのは不安だからな。チリはまだしも、おれやドメスの歳になるとつぶしが利かない」

辛気くさいことを言いながら、アルナーがううんと伸びをした。

今になつて思うと、あるときさつさとアルナーと別れて帰宅すべきだったのだ。

だが、アルナーの演劇に関するうんちくが面白く、おれはつい夢中になつて話こんでしまった。

夜遅く、城壁そばで立ち話をするおれたちの姿は、いやでも目についたはずである。

「おい、そこのおまえら。どこの人間だ？」

険のある声で誰何してきたのは、自警団の団員たちだった。夜警なのか、鉄甲を鍔打ちしたはちがねを巻いている。帯剣用の革ベルトには市の紋章が焼き印してある。

やれやれ、面倒な。

と思つて振り向いた瞬間、おれは自分の行為の浅薄さに気づく。

顔を伏せたままやりすこすべきだったのだ。浮浪者狩りから一ヶ月が経ち、完全に警戒心が緩んでしまっていた。

「おまえ……」

夜警が絶句する。

おれの前に立っているのは、あの日、おれが斧で下水に突き落としたあの少年兵だったのだ。

全身の血液が瞬時に凍る。

少年兵の目が三角になつて、おれの方へ数を歩み出る。

「用がある。詰め所まで来い」

「いやあの……」

腕を掴まれ、そのまま引っぱられそうになるおれ。予想外の事態に頭がまわらない。

「ちよい待ち」

空気が事情を察したのか、アルナーがしゃしゃり出てくる。

「なんだ貴様は？」

「おれはこいつの連れだ。勝手に連れてかれると困るんだよね」

「この男は浮浪者だ」

「えっ、そんなまさか！ こいつはコホ司祭のところで数年前から住み込みで働いてる下男だぞ。浮浪者が聞いて呆れらあ」

「はあ？」

少年が怪訝な顔をする。

「嘘だと思っんなら司祭に確認を取ってくれ。ま、赤恥をかくのはあんただろうがね」

「……庇つとろくな目に遭わんぞ？」

少年兵がどすの利いた声で凄んだ。

十五、六の少年が凄んだところで迫力不足だが、一応、当局の間であるから、いざこざになると厄介だ。

「とにかく来い。話はそれから聞く」

「おい、だからそいつは」

なおもアルナーが食い下がろうとすると、少年兵は無表情のまま拳を突きだし、アルナーの腹部に一撃を叩き込んだ。

「おぐッ！」

目を剥きえさずくアルナー。

「邪魔をするな。賤民の分際が」

ゴミを見るような目で、体をくの字に折って悶えるアルナーを見下した。

こいつ、とんでもないゲス野郎だ。いつぞやの下水で手加減をして損をした。こんなやつだと分かっていたら、ハンマーで徹底的に叩きのめしたのだが。

「ふふふ……」

「うん？」

青ざめるアルナーに、少年兵の眉間に皺が刻まれる。

「あっそう、手え出してくるんだ？へえ、市民を守る立場の自警団サマがねえ」

アルナーは薄笑いを浮かべる。市場でおれを通せんぼをしたときの、あの奇妙な余裕を含んだ微笑だ。

「なら、こつちも考えがある」

そう口にしたが早く、アルナーは地面に手を突き、それを支えに少年兵のあごに強烈な鋭角キックを叩きこんだ。

うずくまった体勢から、瞬時にキックを入れる。超人的な身のこなしのアルナーならではのアクロバティックな攻撃だ。

「事前警告なしの一撃ってのは効くだろ？」

アルナーがいにと破顔する。

つま先であごを撲たれ、少年は仰け反るような姿勢で後ろ向きに吹っ飛んだ。路肩に停めてある清掃用荷車の、馬糞桶の中に頭から顔を突っ込んだ。

「良かったな。ウンがつくぞ」

アルナーが吐き捨てる。

「助かった。感謝する」

「や、謝るのはおれの方だ。かつときて思わず蹴り飛ばしちゃったよ。あのクソガキ、意味もなく一発入れてきやがって」

「どうする？」

「こつなったら、手はひとつだ」

「だろうな」

以心伝心うなずき合うと、おれたちはその場から速やかに逃げだした。

【012】 今後の方針

明くる日の昼、おれたちは人目を避けて商業区の簡易宿泊施設に集合した。

自警団の少年兵を殴り倒したあと、おれたちは追っ手が来る前に宿へ駆け込み、それから一歩も外に出ることなくすごした。

たとえ鼻持ちならないクソガキでも、相手は自警団の一員だ。面子を守るため、組織ぐるみで血まなこになっておれたちを探しだすに決まっている。

案の定、夜明け頃に自警団のベテラン団員が宿にあらわれた。

団員は宿のおかみに「アルナーとクドゥーなる男の行方を知らないか」と問い合わせてきたそうである。

おれの正体がバレたのは当然として、ほんの五、六時間でアルナーの名前まで割れてしまったのは予想外だ。

宵熊座に懇意なおかみさんが「さあ、知らないね」と頑なにつっぱねてくれたので、今回はなんとかしのぎ切ることができた。

だが、アルナーの正体がバレている以上、ここに留まるのは危険だ。どこぞから情報が漏れるのはもはや時間の問題だ。

「困ったことになりましたね」

コホ司祭が口火を切る。

「今朝がた、自警団のお歴々がいらっしやいました。工藤さんのことを、根掘り葉掘り聞かれましたよ」

「どの何者だと尋ねられ、さしものコホ司祭も困窮したようである。」

「聖職者としてはいささか道理に反しますが、田舎の甥だと偽りを申しました。彼らは信じてはいないようでしたが」

「迷惑をおかけしてすみません」

「いえ、気になさらないください。貴方に非があるわけではないのですから。天にまします我らが主も、貴方の身の潔白をご存じて

す」

「お天道さまが信じて、自警団の連中をなだめてくれないんじゃあな」

ドメスが洗面を浮かべる。肩の上にトトが胡桃のかけらをカリコリ齧っている。鼻血が出るラブリーさだ。

「まったく、毎度毎度おまえは余計なことをしてくれる」

「しかし、先に手を出したのはあのガキだ。やられたらやりかえすのがおれたち旅芸人の流儀ってもんだ」

アルナーが口答えをすると、ドメスが頭ごなしに怒鳴りつける。

「バカ野郎が。おまえが蹴り飛ばしたのはな、バルテナ商会の御曹司だぞ！」

「バルテナ商会？」

おれが横から口を挟むと、話の腰を折られたドメスがちつと舌打ちする。

「バルテナはユゴー市で一番の毛織業者だ。たぶん、毛皮の商取引に関しては、边境六領でも随一の有力商会だろうな」

アルナーがしれっと答える。

「つてえと大商人のボンボンか」

「簡単に言ってくれるな。バルテナは市の有力者だ。市参事会員とも顔が利く。息子が泣いて頼めば、おれたちなんぞ適当な余罪をでつち上げられて全員牢獄行きだぞ！」

「怒鳴るなよおっさん。ぶっ倒れるぞ」

アルナーが煙たそうに手で扇ぐ。

ユゴー市のような商業都市では、地元の商人が強い実権を握っているんだらう。そんな街で豪商から睨まれたら、旅の一座の興行など成り立たない。ドメスが取り乱すのももつともだ。

「ドメスさん、あまりアルナーを責めないでやってくれ。彼はおれを庇おうとして殴られたんだ。原因はおれにある」

「おいクドゥー。そいつは誤解だぞ」

アルナーがしかめっ面をする。

「おれはただ単に、あの横暴なガキが気に入らなかつたから抵抗したんだ。そこんところはき違えるな」

アルナーが仏頂面をする。

「しかし参ったな。蹴飛ばした程度で、こんな大騒ぎになるとはね。大人しく殴られておくべきだったかね」

「どうするのドメス？」

今まで沈黙していたチリが不安げにドメスを仰ぐ。背伸びして、肩の上のトトに割れ胡桃を与えた。

「致し方あるまい。予定よりだいぶ早まったが、巡業に出てほとぼりが冷めるのを待つとするか」

「巡業？」

「ツロ、ザリンスク、イヌバスの三領の街や村をめぐるって興行する。半年かけて各地を渡り歩き、ユゴー市に戻ってきて越冬するのが宵熊座の一年だ」

「そつか。旅芸人だもんな」

寒さが緩まる春先から夏にかけて高山帯を行脚し、都市部にて越冬する。そう考えると理に適ったスケジュールだ。

「厳寒期に山越えをするのは老身にこたえるが、まあやってやれんこともない。普段行かない遠隔地の開拓も兼ねて、な」

「ドメス、いいのか？ なんなら、おれ一人でユゴーを離れるが」

「バカを言うな。おまえ抜きで宵熊座をやっていく方がよほど骨だ。そんな神妙な顔をするな。おまえらしくもない」

「だが……」

アルナーが珍しく言い淀む。

「それに、どのみちこのままユゴー市で興行を続けていくのは難しくなつたしな」

ドメスが頭に巻いたさらし布ごしに後頭部を搔く。

「ついさつき商工会議所に呼び出されてな。おれたち旅芸人や辻音楽士、踊り子なんぞが大勢集まってきとつた」

ユゴー市で現在営業許可を得て活動している連中が一堂に集めら

れたのだ。

「市のお偉がたが壇上に立つてくどくどまわりくどく言つとったが、簡単に言つと『今後は市の許可なく街頭に立つて芸能活動をするのを固く禁じる』ってなお触れだつた」

「なにそれ、勝手すぎる！」

チリが食つてかかる。

「わしにあたるな。市の連中が決めたんだ」

ドメスが弱り顔で力なく首を振る。

一応、当局に活動申請を出し、それが受理されればこれまで通りに路上でパフォーマンスが行えるそうだが、実質、表だつた活動が制限されたに等しい。

先だつての浮浪者狩りとおなじく、賤民弾圧の一環だ。旅芸人たちを居づらくさせることで、市内から胡散臭い連中を一掃する目論みに違いない。

「おまえたちは先に市を出る。数日以内におれも雑用を足してあと追う」

「一人で大丈夫なの？」

「ああ、むしろ身軽な方が融通が利く。ここいらは昔馴染みが多いからな。わし一人ならどうとでもなるよ」

ドメスがヒゲを撫でながら言った。

「だが、おれたちはそれで良いとして、クドゥーはどうする？」

「おれは……」

アルナーに水を向けられ、おれは押し詰まった。

このままユゴー市に留まっていたら、コホ司祭に迷惑がかかる。

第一、隠れて生活したところでいずれ見つかる。

それなら行くあてはなくても、おれもこの街を出て行くのが最善だろう。

この一ヶ月弱、コホ司祭からみっちり低地ノルド語の手ほどきを受けて、人並みにしゃべれるまで上達した。着の身着のまま市街の河口に流れ着いたときに比べたら、今後の見通しはずっと明るい。

どんとこいだ。

「ねえミヤト」

そのとき、チリがおれの服の袖をくいくいと引っばる。

「ミヤト、わたしたちと一緒に来ない？」

「おれが？」

「うん、だつてミヤト、この世界では一人ぼっちなんですよ。だつたらわたしたちと一緒に来たらいいと思うの」

チリの大きな瞳がふるふる震える。おれが拒絶するのではないかと不安げな様子だ。

「おれは構わないけど……」

「ほんと？」

「うん、ほかにあてもないしさ」

チリの顔がぱあつと明るくなる。

「おいクドゥー。そんな簡単に決めて良いのか。あんたは元の世界に還る方法を探してるんだろ？」

「まあな」

「だったら、おれたちと一緒にドサまわりなんかしてる場合じゃないだろ。あんたはあんたで、自分の道を進むべきだ」

アルナーがもつともな忠告をしてくれた。たしかに、彼らと共に旅をしたところで、転移石が手に入るとは思えない。

「で、でも……」

「チリ。クドゥーに迷惑をかけんな。おれたちとは住む世界が違う人間なんだから。引き留めるとかえって気の毒だぞ」

アルナーにたしなめられ、チリがしゅんとなる。おれと一緒に来るとなつて浮かれた直後だから、余計落ち込んで可哀想だ。

「御言葉ですが、わたくしはわるいアイディアではないと思いませんよ」

コホ司祭が遠慮がちに話題に加わる。

「朮石というのは帝政時代の遺物ですからね。石を探すのなら、辺境奥地を旅してまわるのはむしろ好都合です」

自分の得意分野の話題になって元気が出たのか、コホ司祭がぺらぺらとくつちゃべる。この人、自分の得意分野になると口が軽くなる。聖職者にしてはオタ気質な人だ。

「古くから独立独尊の意識が強く、王国の支配の手が届いてない辺境六領では、帝政期の遺跡なども多く現存しています。そもそも辺境の民の起源は、古代山岳民族による血縁的な豪族集団ですからね。スーラの教えを強引に広める王国の居丈高な態度を疎んじ、独自の宗教や帝政期の文化を重んじる風潮があります」

コホ司祭が知識を並べたてる。

自らもスーラの聖職者の割に、彼の語り口はラディカルだ。

所属組織に対して批判的な人間というのはどこの世界でも煙たがれるものだから、彼が中央から僻地のオンボロ聖堂に左遷されたのもなんとなく合点がゆく。

「転移石を探すなら、辺境の玄関口であるユゴー市界限よりは、奥地を調べるのが確実だと思われます」

「なるほどな」

おれはうなずき、ドメスの方を見る。この件に関して最終決定権を持つのは、座長である彼だからだ。

「ま、別にわしらとしては、旅仲間が増えるに越したことはないがね。芸ができなくなったら、荷物運びやマネージャーとして働いてくれれば十分だ」

ドメスがお気楽な返答をした。

市を出て行くことを決め、肚が据わったんだろう。本来のマイペースさを取り戻し、信楽焼の狸のようなビール腹を撫でさす。

「ただ、辺境の冬は厳しいぞ。つらい旅路になるが、辛抱なるか？」

「寒いのは平気だ。中学時代、水泳部で毎年寒中水泳させられたからな」

「スイエイ？ よく分からんが、山で冬を越す覚悟があるんなら一緒に来るといい」

「ありがとうございます」

おれはアリを連呼する。

「やれやれ。旅は道連れってのかな。あんだとはつくづく縁がつづくね」

「一緒に頑張ろうね」

アルナーとチリから口々に言われる。

こうして、おれは宵熊座の一員として、彼らの遠征に参加するようになった。

払曉の空に一番鶏の啼き声が響き、おれはがくんとなって目を覚ました。

「寝ちまったのか。」

ズボンに付着した涎の黒いシミを見つめ、しばしばんやりする。

幌の隙間から朝日が射しこんで、寝起きの顔に容赦なく当たるのが眩しかった。

おれの肩にもたれかかって寝こけるチリを横目に眺め、馬車の揺れに身を委ねる。

「よう、お目覚めさん」

おれの前では、アルナーが目をぱちぱち瞬かせている。寝不足で目もとがたるんでしまっている。

「なんだ、寝てないのか？」

「おれは神経が繊細でね。おまえたちこそ、よくこんな揺れの中で眠れるよ」

「言われてみると、ひどい揺れだな」

座っているだけで、強烈な横揺れに見舞われる。木の車輪が舗装されていないあぜ道を通るので、その揺れ具合たるやちょっとした地震クラスだ。

「不覚だが、少しあて酔いした」

アルナーがげっそりとして俯く。あて酔いというのは、いわゆる乗り物酔いだ。船や馬車に乗って気分がわるくなると、憑き魔にあてられたと言うそうである。

「大丈夫か。真っ青だぞ」

「平気だ」

「水飲むか？」

「平気だと言ってるだろ。くどいぞ」

などと強情を張る。

よほど体調がわるいのか、せつかくの美丈夫が台無しだ。なんでも、おれたちが寝ている間に一度馬車を止めてもらい、草間に屈んであげえ戻したとのことだ。

まったく、変なところで頑固だな。

おれは諦めて推移を見守ることにした。

ご覧の通り、今おれたちは馬車の中に居る。

今朝方、ユゴー市を抜けだしてドメスとの合流地点であるエダ村へ向かったのだ。

昨日から一睡もせず、自警団の監視の目をかいくぐって馬車に乗り込んだ。市の関所で検査を食らう懸念があったので、市を出るまではぶどう酒の樽の中に隠れ、息を殺してやりすごした。

が、実際には積み荷検査がされることはなく、用意しておいた袖の下も出番なく終わった。浮いた分の金子は、当面の生活費にあてることになる。

「ねえアル。そんなに気分わるいんなら、外に出てきたら。ここいらまで来たら、もう追っ手が差し向けられる心配もないわ」

「ご免だね。ここで横になってる方が、よっぽど楽だ。御者台に乗って転げ落ちて死んだら末代までの恥だからな」

「そう、なら好きになさい」

「じゃあ、おれが代わりに横座つても良いかな。外の景色、見たいんだ」

遠慮がちに申し出る。

外の景色が見たいとか、子供じみていて恥ずかしい。だが、この世界に来て初めて市街地から出たのだ。事情が許すのなら、景色を心ゆくまで鑑賞したいのが人情だ。

「良いわよ。ええと……」

「工藤といいます」

「クウドー？ 言いにくい名前ね」

また間違えられた。くどうってのはそんな発音しにくい名前なん

だろうか。せめてクドゥーで統一してくれ。

「そう言う貴女の名前の方がよっぽど発音しにくいですよ、ケウイナーさん」

「あらそう?」

幌の隙間から馬車の中を覗きこみ、馭者の女性は艶っぽく微笑する。

彼女がさしのべた手を、おれは掴み、馭者台の助手席へと上がりこんだ。

彼女と手を繋ぐと、ふわふわした毛が指先に触れる。女性に触れて、毛深い、と感じたのは人生で初めてだ。

それもそのはずで、ケウイナー女史は人間以外の血を引くデミヒューマンだ。彼女の祖先、クルツクスは二足歩行をするウサギのような生き物だそうである。

クルツクスを祖先に持つクルツクス人（兎人）は、人間に比べると祖先の性質を色濃く受け継いでいる。全身を隈なく包む栗色の体毛、口もとからぴんと飛び出した長いヒゲ、ロップイヤーのような垂れた耳など、人に近い種族ながら人ならざる者の特徴がある。

「あなたが新顔なんだってね」

「ケウイナーさんも宵熊座の一員だとチリから聞きました」

「一応、ね」

「一応というの?」

「あたしはもっぱら裏方なの。こうして馭者をやったり、旅の計画を立てる役ね」

手綱を握りながら、ケウイナーが語る。

「旅の計画はドメスの仕事なんじゃ?」

「冗談。彼に任せたら、あたしたち遭難しちゃうわよ。あの人ったら、てんで無計画なの。次の村までの日数や、それに応じた水や食料、不測の事態への対応。これ全部あの人に任せたら、一ヶ月で路頭に迷うでしょうね」

「そいつは困る」

「だからあたしみたいなのが重宝がられるのよ。こんな兎人種でも、脳みそまで筋肉のおっさんよりは計画性があるんだから、笑えないわよね」

そう言いながら、ケウイナーは悪戯っぽく長髪の間から垂れさがるふかふかのケモノ耳を抓んでみせる。

「柔らかそうな耳ですね」

「まあね」

「触ってみてもいいですか？」

思わず口にして、おれははっとした。

初対面の女性の耳に触るとか、ド変態かおれは。常識知らずにも程がある。

正直、ビンタされても仕方ない発言だったが、ケウイナーは目を細めると、突然ぶぶつと吹きだした。

「あはは。突然何を言うかと思ったら」

「す、すみません」

ケウイナーは体を斜めに傾ぎ、おれの方に頭を近づけてくる。

「えっ？」

「ほら、どうしたの。触りたいんでしょ」

「や、それはその、単なる冗談で」

「冗談なら触るのやめる？」

ケウイナーはおれの手をむんずと掴み、耳へと持ってゆく。

初めて触れる兎人種の耳は、すべすべして柔らかかった。根もとがコリコリしているのは、たぶん軟骨があるのだ。

「どう、堪能した？」

「し、しました」

「たまにいろのよね。兎人種みると耳を触ってくるやつ。好色な狒々親父だったら、問答無用で股間を踏みつけてやるわね」

おれもあやうく股間が犠牲となるところだったのか。ただでさえ世間知らずの軟弱なやつなのに、踏まれたら気の毒すぎる。

しかし、兎人種を見て物珍しく思うということは、辺境では亜人

は稀な存在なんだろう。ユゴ―市滞在中も、亜人を見かけた記憶はない。たぶん少数民族なんだ。

「半分当たりね。辺境、というかこの大陸では、兎人はほとんどいないの。兎人、というか亜人全般が閉鎖的な種族だから」

ケウイナーの祖国も、数百年もの長きにわたって鎖国をしているそうである。彼女のように祖国を捨てて大陸に渡ってくるのは、ごく少数の変わり種なのだという。

「大陸に渡って二十年になるけど、同族の渡来人に逢ったのは数えるほどね。複雑な理由で国を追われた人や、一攫千金を夢見る山師とか。ま、基本カタギじゃないわね」

「二十年？」

一体幾つくらいなんだろうか。外見からしてアラサーなのは予想がつくが（余談だが、あとでチリに尋ねたら「三十六歳」という返答がかえってきて仰天した。旅の仲間がロリと熟女というのはどうなのか）。

ケウイナーの横に並んで腰をおろした。闊歩する馬のたてがみが熱気をはらんだ風になびく。

越冬だのなんだのとさんざん脅されたが、秋口の気怠い風に吹かれてみると、冬なんてまだまだ先の話に思えてくる。

おれたちの馬車を通っているのは、ユゴ―市郊外の畑の中のおぜ道だ。周囲は一面の麦畑で、小麦やライ麦、燕麦が植えてある。

雄大な景色に、おれはしばし言葉を忘れて見とれた。

実るほど頭を垂れる金色の麦穂の先に、荘園領主のマナーハウスを取り巻くようにして形成された集落が見えてきた。

「あれがエダ村よ。小さな村だけど、辺境交易路の中継地点だからそこそこ活気があるわ」

「名物はユゴニア地鶏の塩釜焼きだ。食慾があるんなら是非食っていくといい。おれはご免こうむるけどな！」

体調が戻ってきたのか、アルナーが幌からぬっと顔を出して手招きする。

「クドゥー、少し席代われ」

「ああ」

おれは入れ替わりに馬車の中に戻る。

地鶏の塩釜焼き、か。

想像するとよだれが出てくる。塩釜焼きが名物というからには、岩塩が採れる土地なんだろうか。だが、塩気のある土地にしては農作物が豊かだ。

おれの疑問は、緩やかな丘陵を越えた瞬間、氷解した。

「お、海か？」

「残念。あれは汽水湖よ」

行く手に広がっているのはユゴニア湖、という海に面した湖だった。日本で言うところの浜名湖か。小学校の頃、うなぎパイの「夜のお菓子」という謳い文句にほのかなエロスを感じていたことを思い出した。

「うなぎパイ、食いたいな」

「ユゴニア湖では鰻は採れないぞ。あれはもっと西方の食いもんだ」

本物の鰻のパイ包みだと勘違いしたのか、アルナーがわざわざ忠告してくれた。まったく、骨の髄までお節介焼きだ。

誤解を解くのも面倒なので、おれは口をつぐんで激しい揺れに身を委ねながら、目をきつく閉じた。

【014】 旅の始まり

エダ村に着いてしばらくすると、ドメスがやってきた。馬車でのんびり来るのかと思いきや、単身馬を駆つての到着だ。

「馬賊つてかんじだな」

「分かる。ドメスつたら山賊顔だよな」

ふーっと荒く息をして外套を脱ぐドメスに、おれとチリは陰口を叩き合った。

「おう、おまえらも無事脱出できたか」

「脱出どころか、道中順風満帆すぎて拍子抜けしたぞ」

「凶悪犯の脱走でもあるまいし、血まなこで追つては来んだろ。所詮は成金息子の無理難題だからなあ。自警団の幹部連中も、さぞかし頭が痛いだろうて」

ドメスは馬を厩舎に繋ぎ、おれたちの泊まる宿で体を休めた。馬に乗るというのは、結構体力を使うものとみえる。

見るからにへとへとで、さすがにこの日はそのまま宿に引っ込むのかと思いきや、そこは旅芸人の意地の見せどころだ。

さつそく、夜になると村の集会所に顔を出し、宵熊座の遠征一発目となる興行を始めた。

未開拓の村や疎遠な土地では、ケウイナーとドメスが村長や領主に掛け合い、人を集める許可を取る。

だが巡業の出発点として、毎年のように立ち寄るエダでは、宵熊座は顔パスで芸ができるのだった。

アルナーの呼び口上が始まると、顔なじみの村人たちがわらわらと集いだした。アルナーが剽軽な仕種で笑いを取り、新入りのおれを紹介する。

「この冴えない彼が、われわれ宵熊座の期待のルーキーだ。みんな、顔を覚えてやってくれ。ひらめみたくのっぺりとしてんだろ」

アルナーがおれの肩をポンと叩く。

ひらめがツボに入ったのか、エダ村の人たちが爆笑する。

彼らのような彫りの深い西洋人顔からすると、おれの面はさぞかし薄っぺらく映るんだろう。他人の山賊顔を笑えない。

「工藤です。よろしくお願ひします」

「工藤？　ぷっ、変な名前」

村の小娘がどこかで吹きだした。変な名前呼ばわりするくせして正確に発音してくるのが地味にイラツとくる。

「おれの飼い犬がクドって名前だったな」

「クドは死んだカミさんだろ」

「ああ、そうだったか」

どこぞでは間抜けな会話が聞こえてくる。奥さんの名前くらい覚えててやれよ……

「そいつは何か芸はできるのか？」

「宵熊座の一員なら、とつときのスゲえ芸をしてくれるんだろうな？」

「おいおい、楽しみだなこりゃあ！」

今度は別の男性たちが口ぐちに尋ねる。一杯呑んでるのか、三人とも赤ら顔である。

もしかしておれ、期待されてる？

これで「芸なんてできません」とか言ったら、明らかに場が白けること請け合いだ。

おれは冷や汗を垂らして、ちらちらとアルナーに助け船を求める。

「まだこれからだ。芸がないのも芸のうちってね。これから一冬かけて仕込むから、来年の今ごろには何か気の利いた芸をお披露目できるだろうよ。なあクドウー？」

「えっ？」

「なあクドウー？」

空気読めよ、的な調子で詰め寄られ、応とも、と適当な返事をする。

ドメスはお手伝いで十分だと言ってたが、やはり旅芸人の一座に

入ったからには、何か学ばなくてはならないのか。

やれやれ、必死に言語を学んだと思つたら、次は芸の習得とは。生涯学習万歳だな。

村人の八割がたの人間が揃い踏み、最後に領主館から地主一族が御出ましたところで、宵熊座の三人による記念すべき一発目の興行の幕が切つて落とされた。

まず先陣を切つたのはチリだった。十八番のナイフ投げを披露するかと思いきや、おもむろに踊りはじめた。

へえ、舞踏も嗜んでいるのか。旅芸人ともなると、色々手広く出来ないと観衆から飽きられてしまふだろう。

アルナーがリュートを爪弾き、ドメスがバグパイプのような楽器を吹き鳴らす。

チリは夢見る乙女のようなうっとりとしたまなざしで、華麗に手足を動かし、ステップを刻んだ。少し艶容な、アラビアンナイトを髣髴とさせる舞踏だ。

おれはチリのダンスに見とれながら、観客たちの様子を見やる。が、エダ村の人たちはいまいち乗り切れてない様子だ。見飽きている、というのではなく、チリのダンスに関心がない。

数人の酔っ払いは「いいぞー」「ひゅー」と熱い声援を寄越してくれるが、全体的な反応としては冷やかだ。

おそらく、みんなチリのナイフ投げを見たいのであって、そこそこ上手い程度の野暮な踊りなど興味ないのだ。

うーん、なるほどな。

厳しい言い方をすると、チリのダンスはそこまで魅力的ではない。一応手の動きや足の運びは決まっているのだが、グルーヴ感が決定的に足りない。一言で言うなら「ノリ」がわるいのだ。

優等生がちんたら「はいはい踊ってみましたよ」という風な態度が透けて見える。ナイフ投げみたく好きが高じて達人の域に達したような一途さが足りない。かろうじてチリの可愛さで場が持っているようなものだ。

やがてダンスがフィニッシュを迎えると、おざなりな拍手が鳴らされた。

観衆のつれない反応に、チリの瞳に失望の色が見え隠れする。が、そこはプロのそつのなさで、すぐに気持ち切りかえ、腰からナイフを引き抜く。

すると村人たちの空気が一変する。今年はどうな超絶技巧をみせてくれるのかと、かぶり寄るような好奇の目が注がれる。

周囲の空気が変わったことで、チリはほっとしたような様子だったが、同時にやや不満げでもある。

評価の安定したナイフ投げより、新芸の舞踏の方で反応を得たかったのか。

内面の不満がナイフ投げにも悪影響を及ぼしたのか、最後、あらかじめ木に括り付けてある林檎をナイフで撃ち落とす演目で、五本中の一本をはずした。

チリは一瞬啞然としたが、はっとして「あちゃー」と大ききさげにつけてみせる。わざとはずしたように偽装したのだ。

それから気を取り直し、最後の林檎を三本のナイフで六等分に割る演目を成功させたため、なんとか挽回できた。

そこからアルナーの新芸（チリが六等分にした林檎をジャグリングし、一つ一つ丸呑みするというもの）で笑いを誘い、ドメスが亡国の姫と竜騎士にまつわる悲恋のバラッドで観客の心を掴んだ。

最後にトトとドメスの寸劇（ドメスのポケットの胡桃を、トトがなんとかして盗もうとするのだが、あと一步のところで毎回ドメスに見つかって抓み出されるという内容）で場を和ませる。

すべての演目をやりきると、村人たちから割れんばかりの拍手と賛辞が送られた。

ユゴー市の興行ではチリの投擲技術が場をかつさらったが、今回はドメスの燻し銀の演目が功を奏したかたちだ。

おなじような芸でも、時と場所によってウケるものが異なる。観客の反応によって出し物も変える必要が生じる。シビアな世界に生

きているのだ。

もちろん、おれも他人事ではない。これから彼らにつき学び、その芸を盗み取らなくてはならないのだから。

出し物のあとは、村の公会堂で簡単な食事が催された。

石造りのホールに板きれが運び込まれ、即席の架台が造られる。

燭台に火が灯され、暖かな光に室内が満たされた。

海に近い立地もあって、饗される料理の多くは海産物だった。燻製ニシンやイワシの菜種油漬け、ミルクーナ味の牡蠣モドキやどめ色の貝柱、不気味な深海魚などの海の幸が食卓に上った。

「クドゥー、食べてる？」

ケウイナーが皿を手におれの隣に腰をおろした。皿には数種類のチーズが盛りつけてある。鼻のひん曲がるような悪臭を放つ黄土色のチーズだ。

「凄いチーズだな」

「醗酵した魚の汁を混ぜ込んだのであるの。慣れないうちは鼻につくけれど、食べると病みつきになるわよ」

ケウイナーが長い前歯で激臭チーズを齧る。プラチナブロンドの美しい髪が蝋燭の光を浴びて艶やかな輪を宿した。

「ん？ あたしの顔どうかした？」

「いや、チリの姿が見えないなと思って」

「そういえばそうね」

チーズ臭い息をしながら、ケウイナーがきよろきよろした。

「どこかで食べてるんじゃない」

「探してくる」

「ほっときなさい。お節介焼きな男は嫌われるわよ」

ケウイナーはアルナーの方をちらと一瞥すると、アンニユイな嘲笑を浮かべる。

「こつ見えておれもお節介なもんでね」

「あらそう。残念ね」

ケウイナーは首をすくめると、もうおれに関心をなくした様子で、周囲の農夫たちの輪に加わって談笑しだした。

宴の席を目立って中座するのも失礼なので、おれはそっと公会堂を抜けだした。

燭台を手にしてきたが、風防付きではないので、風に吹かれて一瞬で消えた。軽く鼻を鳴らし、暗闇を夜目に任せて進んでゆく。

この世界に来てから、夜でも目が利くようになった。多少の月明かりさえあれば、問題なく行動できる。

逆に元の世界に帰ったら、夜でも明るすぎて違和感を感じるだろうな。省エネだの何だの言いながら、東京の夜空は明るすぎる。

かざした手のひらさえ見えない闇こそ、原初の闇、まことの夜の闇だ。

おれは辛うじてシルエツトで判別できる程度の闇の中を、ひらすら歩いて行く。迷わなかったのは、歌声が聞こえたからだ。

公会堂の裏の、壊れた酒樽や錆びたたがが放置してあるすさんだ一角に、チリの気配がした。

「そこで何してるんだ」

「ミヤト？」

チリがはつとしてこちらを向く。

「な、何しに来たの？」

「会場に姿が見えなかったから」

「うるさいから出てきたの」

公会堂の中では、はめをはずした農夫たちが呑めや歌えやの大絶唱だ。ほとんど呑まない素面のチリが鬱陶しく思うのは当たり前だった。

「唄の練習してたの？」

「考え事してた」

「今日の演目のこと？」

ダンスの評判がわるかったのと、必中のナイフをはずしたのが原因か。

と思いきや、うつんと首を横に振る。

「お母さんのこと、考えてたの」

空の星座を眺めながら、チリが放心した様子でつぶやく。

「お母さんね、お父さんと結婚するまでは踊り子だったんだよ。それも酒場とかじゃなくて、王宮付きの踊り子だった」

「上手かったんだ」

「上手いなんてもんじゃなかった。王都のスーラ大聖堂での式典でも、お母さんが神の舞い手を演じたりしたんだから」

「神の舞い手？」

「巫女を務めたの。本当の修行を積んだ巫女じゃなくて、その日限りの巫女だけだね。でも、大事な役目だった。一年の野菜や麦の出来不出来を決める仕事だったから」

豊作祈願か。

チリの母は、神に捧げる舞いを踊れるほどの踊り手だったということになる。

「わたしもお母さんみたいに踊れないかと思ってさ。思い出をたどって真似してみるんだけど、難しいよね」

「チリ……」

「ごめんミヤト。わたしなんか弱気だね」

チリがため息を吐く。

外面は軽く流していたが、実際は受け入れられなくて結構ショックなんだろっ。

幼くして母を亡くした彼女にとって、母の舞う姿は数少ない接点のひとつだ。だから満足な評価を得られないと、母との絆を否定されたような気持ちにさせられるのだ。

「なあチリ。そんな焦るなよ」

「……」

「こんなの説教臭いって思うだろうけどさ、まだ若いんだし、これからどんどんダンスの腕だつて上達する。逆にナイフの腕が落ちることだつてあるかもしれない」

「そ、そんなの絶対ないない！」

特技を否定された気がしたのか、チリがむきになって反論する。

「いいやあるね。人間、歳取るとどんどん出来ること、出来ないことが変わっていく。そういうのって地味な変化で気づきにくくて、あるときふと昔の自分と今の時分の違いに気づいてびっくりするんだよ」

「……何が言いたいの？」

「だからさ、ちよつとの練習や努力だけで結果を判断しちゃダメだ。大事なのはそれを続けられるかどうかで、もっと大事なのは、それを続けるのが楽しいかどうかなんだ」

「楽しい？」

「楽しかったら、才能なんてなくなっちゃって続けられるもんだ。逆に楽しくなかったら、どんなに才能があつたってダメになる。ナイフ投げだって、楽しいからこそ、ずっと続けてこられたんだろ？」

「うん……」

チリがこくんとうなづく。

「大事なのはそこだよ。楽しいかどうかが一番大事。才能なんて二の次なんだから、まずは楽しく踊るのが肝心だよ」

おれは懇々と優しく諭した。

だが、無論こんなのはきれいな事だ。路銀の稼ぎが生き死にに直結する旅芸人なら、楽しいかどうかで踊るのは許されまい。才能の無さゆえに芸が金にならないというのは、チリと宵熊座にとって死活問題なのだ。

でも、それでもダンスが母親との数少ない思い出なのなら、それを「仕事」や「金銭」の枠に押し込んでしまうのは可哀想だ。

たとえ生活のため、金のためであっても、そこに好きを持ちこんで何がわるいか、とおれは思うのだ。

「ミヤト、励ましてくれてるの？」

「えっ、ああまあ」

チリがまんまるな瞳でおれを見つめる。

三日月の鋭利な光を宿したその瞳は、見つめていると吸い込まれ
そうな気がしてくる。

「ミヤト、優しいね」

チリが哀しげに微笑する。

「でも、ミヤトはおこさまだね」

「えっ？」

おれが面食らった瞬間、チリがいと意地悪な微笑をうかべてお
れの頬にくちゅっとキスをした。

「なっ」

「えへへ。励ましてくれたお礼」

チリがおれから離れ、少し先でくるっと半回転しておれの方を見
やる。

「わたしね、もしナイフ投げが完全に飽きられちゃったら、街角に
立って男に体売ろうと思ってるんだ」

公園に遊びに行くような屈託ない口調で、チリがさらりととんで
もないことを言った。

「だって、みんなに迷惑かけらんないもの。わたしの体なら、お金
を出して買ってくれる男はたくさん居る。そうやって自分の芸の道
を諦めて娼婦になった子、たくさん見てきたから知ってるの」

「おい、冗談だろ？」

おれが押し殺した声で言うと、チリはにやあと曖昧にうなづく。

「半分ね。だってわたしのナイフ投げが飽きられるなんて、あり得
ないもん。第一、そうならないために新しい芸を開拓してるんだか
ら。踊るのだって絶対諦めない」

そう言ってチリは瞳に闘志を燃やした。

そんなチリを見ていると、おれは自分の甘さが恥ずかしくなっ
てくる。

浮浪者に身をやつしてさえ、ガンデに食い物を提供してもらって
いた自分は、生活に困窮して食い詰める恐怖がまるで分かってなか
ったのだ。

この子には敵わないな。

自分の三分の二も生きてない少女の前に、おれはただ打ちのめされ、頬に残る幼いキスの感触に胸が痛んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7652z/>

勇者はひらりと身をかまし

2012年1月12日01時50分発行